高槻市文化財年報

平成12年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査 …… 1

1　平成12年度の調査

2　調査の概要

今城塚古墳第４次規模確認調査　宮崎　康雄

高槻城三ノ丸跡の調査　宮崎　康雄

古曽部焼窯跡の調査　橋本　久和

安満山古墳群萩之庄支群Ｃ１号墳の調査　鐘ヶ江一朗

神内遺跡の調査　橋本　久和　高橋　公一　木曽　広

Ⅱ　文化財保護啓発事業 …… 29

Ⅲ　指定文化財 …… 33

Ⅳ　報　告 …… 35

今城塚古墳前方部における地滑りの痕跡　寒川　旭

歴史体験事業報告

「弥生時代の竪穴住居を復元しよう！」　鐘ヶ江一朗

２００２年３月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成12年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査

1．平成12年度の調査

平成12年度の土木工事等に伴う埋蔵文化財調査の届出・通知件数は、繰越分を含めて77件を数え、このうち67件について発掘調査を実施した。昨年よりも９件減少しており、過去10年間では最低となった。平成４・５・９年度にそれぞれ102件実施していることからすれば、約3分の２に減少したことになる。届出別及び遺跡別の調査件数を表２・表３にまとめた。まとまった面積の開発件数が増加に転じるきざしをみせつつあるなか、個人住宅は低調であった。一方調査を実施した遺跡数は、前年度22遺跡から27遺跡へと増加した。このうち鴨神社跡や神峰山寺跡は、初めて発掘調査を実施した遺跡である。

それぞれの調査概略を表１にまとめ、主な調査については次節に抄報を収録したが、それらを含め平成12年度の調査成果について簡単に振り返っておく。まず嶋上郡衙跡では、遺跡縁辺部の調査が大半を占めることもあって、郡衙関連の遺構は検出されなかった。

中城遺跡（2000−C）では、既存宅地に伴う削平を免れた一画で良好な包含層をはじめて確認し、ごく少量ながら弥生～中世の遺物が出土、柱穴も検出した。

鴨神社跡は、富田遺跡と宮田遺跡、茨木市総持寺遺跡のほぼ中間に位置する。限定された範囲の調査ながら、律令期と考えられる柱穴群を検出した。今後この地域での調査の進展に期待したい。

史跡今城塚古墳では、前方部の確認調査を実施し、墳丘全長が確定したほか、墳丘変形に地震が少なからぬ影響を及ぼしていることなどが判明した。今後整備計画の具体化に向けて、貴重な資料となるものである。

郡家今城遺跡では、遺構分布が希薄とみられていた南西縁辺部の調査地（2000−A）で、律令期の建物遺構や複雑に切り合う土坑墓群のほか、後期旧石器時代のサヌカイト剥片・チャート小礫群を検出した。さらに南側（2000−B）では古墳を検出、周濠内から鶏形埴輪の頭部２点など埴輪片・須恵器片が出土した。今後の隣接地の調査が期される。

高槻城跡（2000−A）では、中世の大堀と近世外堀が重なる一画を調査し、高山右近在城期の施設並びに元和修築時の土木工事の一端を明らかにする成果を得た。

安満山古墳群では萩之庄支群Ｃ１号墳を発見、調査した（2000−A）。多数の鉄製武器・工具類、金環、ガラス小玉、コンパス文がめぐる須恵器器台などが出土し、小墳ながら注目される。同古墳群の調査は平成13年度も継続しており、さらなる成果が期待される。

最後に神内遺跡では、平成10年度に着手した土地区画整理事業に伴う事前調査（2000−A）が終了した。縄文時代から中世にわたる各時代の遺構・遺物を検出し、この地域の歴史的変遷が一定想定できるようになってきた。

No	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
1	嶋上郡衙跡(2000-A)	川西町一丁目956-3	椿原　元一	個人住宅	47.54
2	嶋上郡衙跡(2000-1)	清福寺町879	河村　武信	個人住宅	269.77
3	嶋上郡衙跡(2000-5)	川西町一丁目1015-9	五十嵐　馨	個人住宅	59.22
4	嶋上郡衙跡(2000-3)	川西町一丁目1015-10	山口　幸弘	個人住宅	65.51
5	嶋上郡衙跡(2000-6)	郡家新町156-33	田上　将也	個人住宅	48.15
6	嶋上郡衙跡(2000-4)	川西町一丁目1010-4	白井　光雄	個人住宅	197.55
7	嶋上郡衙跡(2000-2)	川西町一丁目1015-8	早瀬戸　正雄	個人住宅	61.01
8	嶋上郡衙跡(2000-B)	郡家新町163-43	森田　修	個人住宅	62.73
9	嶋上郡衙跡(2000-7)	今城町164-49	浦島　正	個人住宅	77.35
10	嶋上郡衙跡(2000-C)	清福寺町757の一部	植村　よし子	共同住宅	398.36
11	嶋上郡衙跡(2000-D)	川西町一丁目1008	サンスター株式会社	下水道接続	60.00
12	嶋上郡衙跡(2000-E)	郡家新町348-1	高谷　健三	個人住宅	265.25
13	土室遺跡(2000-1)	上土室六丁目131-45,126-2	小林　洋明	個人住宅	74.20
14	土室遺跡(2000-A)	上土室六丁目10地先	高槻市長	下水道建設	146.80
15	中城遺跡(2000-1)	昭和台町二丁目144-2	藤原　由賀里	個人住宅	132.98
16	中城遺跡(2000-2)	昭和台町二丁目144-1	松山　晉介	個人住宅	148.77
17	中城遺跡(2000-A)	昭和台町二丁目124-2／-3	株式会社宏友建設	分譲住宅	203.29
18	中城遺跡(2000-B)	昭和台町一丁目82	佐藤　津代美	個人住宅	262.42
19	中城遺跡(2000-C)	昭和台町二丁目124-1	株式会社宏友建設	分譲住宅	101.17
20	中城遺跡(2000-D)	昭和台町二丁目124-4／-5	株式会社宏友建設	分譲住宅	201.38
21	鴨神社跡(2000-A)	赤大路町358-3	伊藤忠都市開発株式会社	共同住宅	1,709.28
22	富田遺跡(2000-1)	富田町四丁目2488	渡辺　徹	個人住宅	146.24
23	教行寺跡(2000-1)	富田町六丁目2685-1の一部	和田　義伸	個人住宅	120.11
24	氷室塚古墳(2000-1)	氷室町二丁目571-26	深見　智彦・恵	個人住宅	100.01
25	氷室塚古墳(2000-2)	氷室町二丁目571-31	上原　雅敏	個人住宅	100.25
26	前塚古墳(2000-A)	岡本町75-1の一部	白倉　美佐子	個人住宅	369.19
27	前塚古墳(2000-B)	岡本町75-1の一部	清見　伴美	個人住宅	436.54
28	今城塚古墳(2000-A)	氷室町一丁目748,878	吉田　久雄	駐車場	184.30
29	史跡今城塚古墳(2000-1)	郡家新町	高槻市教育委員会	規模確認調査	600.00
30	岡本山古墓群(2000-A)	岡本町6-2～13-3	高槻市長	下水道建設	389.00
31	郡家今城遺跡(2000-A)	氷室町一丁目788－1他	株式会社大江住宅	宅地造成	1,869.00
32	郡家今城遺跡(2000-B)	氷室町一丁目874	株式会社大江住宅	分譲住宅	152.00
33	郡家今城遺跡(2000-C)	氷室町一丁目他	高槻市長	下水道建設	627.00
34	郡家今城遺跡(2000-D)	郡家新町58,59,61	住まいのタナカ	分譲住宅	781.08
35	津之江南遺跡(2000-A)	津之江北町235-1他	ヤマトハウジング株式会社	分譲住宅	1,524.00
36	津之江南遺跡(2000-B)	津之江北町18,19,20	高槻市土地開発公社	擁壁設置	3,793.00
37	大蔵司遺跡(2000-A)	大蔵司二丁目地内	高槻市長	下水管埋設	546.54
38	宮之川原遺跡(2000-2)	宮之川原五丁目505-23	大森　勲	個人住宅	90.00
39	宮之川原遺跡(2000-3)	宮之川原五丁目512-4	古川　哲史	個人住宅	70.76
40	宮之川原遺跡(2000-A)	宮之川原元町815	山本工務店	分譲住宅	505.34
41	宮之川原遺跡(2000-4)	宮之川原元町889-12	中谷　洋子	個人住宅	242.03

表1　平成12年度調査地一覧(1)

担当者	調査期間	調　査　内　容
難　波	12.4.17	掘削深11.5m、地山面に到達せず
宮　崎	12.7.18～28	※地表下0.8～1mで黄褐色砂礫の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	12.8.1～2	※地表下0.9mで黄灰色土の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	12.8.3～4	※地表下0.9mで黄灰色土の地山確認　遺構・遺物なし
宮　崎	12.9.5～6	※地表下1.1mで淡黄色土～青灰色砂の地山検出　遺構遺物なし
橋　本	12.10.24～27	※地表下1.0mで地山確認　包含層0.1m、落ち込み検出
木　曽	12.10.30～31	※地表下1.1mで黄灰色粘土の地山確認　遺構遺物なし
木　曽	12.11.4～6	地表下1.6mで地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	12.11.28～30	※地表下1m掘削、地山面に到達せず遺構・遺物なし。
橋　本	12.12.8～12	地表下2.0mで淡黄褐色礫面を検出　不定形土坑を検出
木　曽	13.3.1	掘削深さ0.3m。遺構面に到達せず
鐘ケ江	13.3.12～15	地表下0.3mで黄灰色粘土の地山検出　土坑墓群・柱穴を検出
宮　崎	12.8.17～22	※地表下1.7mで淡黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物なし
木　曽	13.2.14	地表下1.6mで黄灰色粘土の地山確認
橋　本	12.9.18～22	※地表下1.8m掘削、撹乱坑のため地山面に到達せず
橋　本	12.11.16～17	※地表下0.5mで黄褐色土の地山確認遺構・遺物なし
橋　本	12.12.14	地表下0.3mで黄褐色砂礫の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	13.1.4	地表下0.7mで黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物なし
鐘ケ江	13.1.12	地表下0.3mで黄灰色粘土の地山確認　包含層、柱穴検出
鐘ケ江	13.1.12	地表下1.2mまで撹乱　地山は黄褐色砂礫
高　橋	12.7.12～17	地表下1.6mで赤褐色粘質土の地山確認。柵列・溝を確認
高　橋	12.6.15～16	※地表下1～1.8mで黄褐色砂質土の地山確認　包含層2面、溝検出
橋　本	12.6.27	※地表下1.0mで黄褐色礫の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	12.5.9～10	※地表下1.5m掘削、ため池埋立土確認　地山面に到達せず
橋　本	12.5.9～11	※地表下1.6m掘削、ため池埋立土確認　地山面に到達せず
木　曽	13.1.9～17	地表下1.8mで周濠底確認　転落した葺石・埴輪片少量出土
木　曽	13.1.9～18	地表下1.9mで周濠底確認　転落した葺石・埴輪片少量出土
宮　崎	12.7.21	地表下0.7mで黄褐色土の地山確認　遺構・遺物なし
宮　崎	12.9.13～12.27	史跡現状変更。前方部の規模確認調査（第4次）　**本書掲載**
木　曽	13.2.14	地表下1.8mで黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物なし
鐘ケ江	12.9.20～10.25	律令期の建物1・総柱建物1・焼土坑・土坑群、旧石器時代の礫群検出
鐘ケ江	12.10.18～28	古墳周濠の一部検出　鶏形埴輪2・円筒埴輪、須恵器壺片出土
木　曽	12.12.4	地表下1.2mで黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物なし
宮　崎	13.1.24～2.2	地表下0.4mで古墳時代前期の土坑墓群と山陽道跡を検出
鐘ケ江	12.6.19～7.5	耕土直下で黄褐色土の地山確認　竪穴住居2、総柱建物1検出
鐘ケ江	13.3.2～3.3	神社境内に包含層0.2m確認。外周水田は地山を0.1m以上削平
橋　本	12.10.13～12.12	遺構・遺物確認できず
宮　崎	12.6.26	※地表下0.9mで2次堆積の包含層0.5m検出　地山は暗青灰色土
宮　崎	12.6.30	※地表下1.7mで黄褐色土の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	12.7.13	地表下0.7mで黄褐色土の地山確認　遺構・遺物なし
宮　崎	12.8.7～11	※地表下1.7mで黄褐色粘土の地山確認　遺構・遺物なし

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
42	宮之川原遺跡(2000-1)	宮之川原五丁目505-25	眞野　多佳夫	個人住宅	109.40
43	神峰山寺跡(2000-1)	大字原3302	(宗)神峰山寺	庫裏付寺院	3,089.23
44	芝生遺跡(2000-A)	芝生町四丁目33-4他	森下株式会社	店舗	12,150.00
45	高槻城跡(2000-B)	城内町1498-11	高槻市教育委員会	展示施設	2,129.05
46	高槻城跡(2000-C)	大手町3他	高槻市長	道路新設改修	513.00
47	高槻城跡(2000-3)	野見町1251-15	義積　呈	個人住宅	122.45
48	高槻城跡(2000-D)	出丸町993-1／-2	上西　康雄	分譲住宅	1,774.00
49	高槻城跡(2000-1)	出丸町992-18の一部	飯田　照美	個人住宅	49.65
50	高槻城跡(2000-2)	出丸町992-18の一部	竹内　早苗	個人住宅	49.96
51	高槻城跡(2000-A)	出丸町1244-17	前田　篤志・里絵子	個人住宅	76.41
52	天神山遺跡(2000-1)	天神町二丁目932-15の一部	笠原　庸史・京子	個人住宅	188.47
53	天神山遺跡(2000-A)	天神町二丁目932-92	山平　良也	個人住宅	159.22
54	昼神車塚古墳(2000-A)	天神町一丁目1063,8-2	吉田　兼寛	共同住宅	825.06
55	古曽部焼窯跡(2000-1)	古曽部町三丁目地内	高槻市長	都市計画道路	2,400.00
56	安満遺跡(2000-A)	高垣町264-1	太田　茂久三	共同住宅	813.39
57	史跡安満遺跡(2000-B)	八丁畷町地内	高槻市教育委員会	管理用外柵	L=40m
58	安満北遺跡(2000-1)	安満中の町472-1の一部	増田　正志	個人住宅	115.37
59	安満北遺跡(2000-2)	安満中の町472-1の一部	内藤　俊一	個人住宅	115.43
60	安満北遺跡(2000-3)	安満中の町494-24	小玉　芳郎	個人住宅	84.00
61	安満山古墳群(2000-A)	安満御所の町1325-1他	高槻市長	公園墓地造成	98,880.00
62	悉檀寺跡(2000-1)	成合北の町1301	春日神社建設委員会	神社建替え	2,741.94
63	梶原寺跡(2000-A)	梶原一丁目378-1／-2	(宗)田中寺	寺院新築	1,038.37
64	梶原南遺跡(2000-A)	梶原四丁目634-1,572	関西産業株式会社	分譲住宅	1,980.00
65	神内遺跡(2000-A)	神内二丁目	上牧駅北土地区画整理組合	区画整理	5,020.00
66	神内遺跡(2000-B)	神内二丁目93-15他	山内　茂	住宅兼作業場	212.45
67	神内遺跡(2000-C)	神内二丁目102-3, 103-3/-4	医療法人清仁会	老人福祉施設	661.29

表1　平成12年度調査地一覧(2)

個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫等	造成工事等	道路・水路改修	上下水道整備	その他	計
34	4	7	12	2	5	3 (2)	67 (2)

表2　平成12年度　届出別調査件数　　下段(　)内は史跡の現状変更等許可申請に伴う調査

担当者	調査期間	調査内容
高　橋	12.12.1～6	※地表下1m以下で2次堆積の包含層3面・計1.05m検出
橋　本	12.10.2～19	※地表下0.6mで黄灰色土の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	13.3.2	地表下2.0mで青灰色粘土を確認　遺構・遺物なし
難　波	12.4.24～7.17	三ノ丸東郭地区の調査　**本書掲載**
橋　本	12.9.1～12.22	遺構・遺物確認できず
橋　本	12.9.7	※地表下2mまで掘削　青灰色粘土の外堀埋立土を確認
橋　本	12.11.15	地表下1.5mで青灰色粘土を確認　堀の上面とみられる
木　曽	12.12.20	※地表下1.1mで黄灰色砂礫土の地山確認　遺構・遺物なし
木　曽	12.12.21～22	※地表下1.3mで黄灰色砂礫土の地山確認　遺構・遺物なし
難　波	12.3.30	遺構・遺物確認できず
鐘ケ江	12.9.8～14	※整地土0.2mの直下で黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物なし
鐘ケ江	13.3.5	整地土0.2mの直下で黄灰色粘土の地山確認　遺構・遺物なし
宮　崎	12.6.21～22	地表下0.5～0.7mで黄褐色礫土の地山確認　遺構・遺物なし
橋　本	12.5.11～7.11	古曽部焼の陶片コンテナ約300箱分を採集　**本書掲載**
宮　崎	13.2.9	地表下1.0mで包含層0.2m確認　弥生土器・土師器検出
橋　本	12.5.19	史跡現状変更　遺構面に達せず
鐘ケ江	12.5.16～19	※地表下0.7mで包含層0.3m検出 地山面で柱穴5個検出
鐘ケ江	12.5.16～19	※地表下2.1mで明茶色シルトの地山確認 旧河道検出。
宮　崎	12.7.6～14	※地表下0.9mで黄褐色礫の地山確認 遺構・遺物なし
鐘ケ江	12.1130～12.19	萩之庄支群C1号墳の調査 **本書掲載**
鐘ケ江	12.8.23～13.2.2	※地表下0.05ないし1.0mで礫土の地山 弥生～近世の遺物少量出土
高　橋	13.3.9～15	地表下1.0mで中世の整地層確認 整地層上面で土坑・小穴検出
橋　本	12.9.14	地表下1.2mで黄色土の地山確認 遺構・遺物なし
橋　本	12.4.6～8.31	**本書掲載**
橋　本	13.1.16	遺構・遺物確認できず
木　曽	13.3.8	地表下2.1mで黄灰褐色土の地山確認 遺構・遺物なし

遺跡別・調査年月日順に配列。※は高槻市文化財調査概要 XXVII「嶋上遺跡群25」に掲載

遺跡名	件数	遺跡名	件数	遺跡名	件数
嶋上郡衙跡	12	岡本山古墓群	1	昼神車塚古墳	1
土室遺跡	2	郡家今城遺跡	4	古曽部焼窯跡	1
中城遺跡	6	津之江南遺跡	2	安満遺跡	2
鴨神社跡	1	大蔵司遺跡	1	安満北遺跡	3
富田遺跡	1	宮之川原遺跡	5	安満山古墳群	1
教行寺跡	1	神峰山寺跡	1	悉檀寺跡	1
氷室塚古墳	2	芝生遺跡	1	梶原寺跡	1
今城塚古墳	2	高槻城跡	7	梶原南遺跡	1
前塚古墳	2	天神山遺跡	2	神内遺跡	3

表3　平成12年度　遺跡別調査件数

2．調査の概要

今城塚古墳第４次規模確認調査

宮　崎　康　雄

今城塚古墳は、６世紀前半に築造された二重の濠を有する前方後円墳で、淀川北岸で最大級の前方後円墳である。

本市教育委員会では、古墳の保存整備に必要な古墳各部のデータを得るために、平成９年度より規模確認調査を実施している。第１次～第３次調査については後円部の遺存状況や内濠の幅・深さ等の形状把握と墳丘・内堤それぞれ基礎部分のそして内外濠埋土の観察・状況把握をおもな目的としたもので、古墳の規模や形状に関するデータを得るとともに、城砦は永禄11（1568）年に摂津へ侵攻した織田信長による築城を想定できるようになった。

今回の第４次調査は、前方部から内・外濠にかけての形状や遺存状況を把握するため、調査区を前方部西側に設定して実施した。

図1　調査位置図

遺　構（図版第１）

墳　丘　前方部では盛土と築造時の旧地表面（地山）を確認した。盛土は幅40㎝、厚さ10㎝前後の小土塊を旧地表に積み上げており、土層断面から土塊の向きは長辺が水平方向を示す一部を除いて、多くが墳丘側で東、内濠側では西もしくは東に向かって傾斜・褶曲した状況であった。盛土中には大小の亀裂が縦横にのび、地山との境にはすべり面を明瞭にとどめる。地山の標高は約24.8mである。

内　濠　墳丘側と内堤側の斜面裾を確認した。底はほぼ平坦で約幅17m、深さは地表から3.6mをはかる。斜面角度は墳丘側22～25度、内堤側は22度である。層序は耕作土、崩壊土、堆積土となり、堆積土はさらに泥土層と砂質粘土層に大別できる。泥土層は厚さが約0.8mあり、円筒埴輪やドングリ・倒木などの植物遺体を含む。砂質粘土層は泥土層上に堆積し、各所に薄い砂層を挟む。すべり面直下からはヒシの種子が出土した。

墳丘側と内堤側の斜面には列石が転落していた。いずれも径0.2～0.8mの川原石を用いるが、いずれも原位置をとどめていなかった。崩落位置や出土量からみて、水際を巡っていたのであろう。

内　堤　築造時の旧地表と盛土を確認した。旧地表は西端で標高27.3m、東端が26.9mと東へ向かってわずかに傾斜する。盛土は黄褐色粘土の拳大程度の土塊を約0.6～１mの厚さで積み上げており、墳丘盛土の状況とは異なる。

内堤上面では埴輪列があり、西辺端部では６個体検出した。内堤側辺に平行して南北に並び、すべて円筒である。東側についてはすでに攪乱を受けて原位置を保つものはなく、掘形も削平されていた。

外　濠　濠底と斜面裾を確認した。底はほぼ水平で底幅約19m、深さ0.6mを測る。堀底には幅６m、地表面からの深さ約３mの溝があり、内堤に沿って南流後、東へ屈曲して内濠に達する。外濠には水を湛えていないものの、溝は一定量の水流があったことが埋土の状況から判明している。

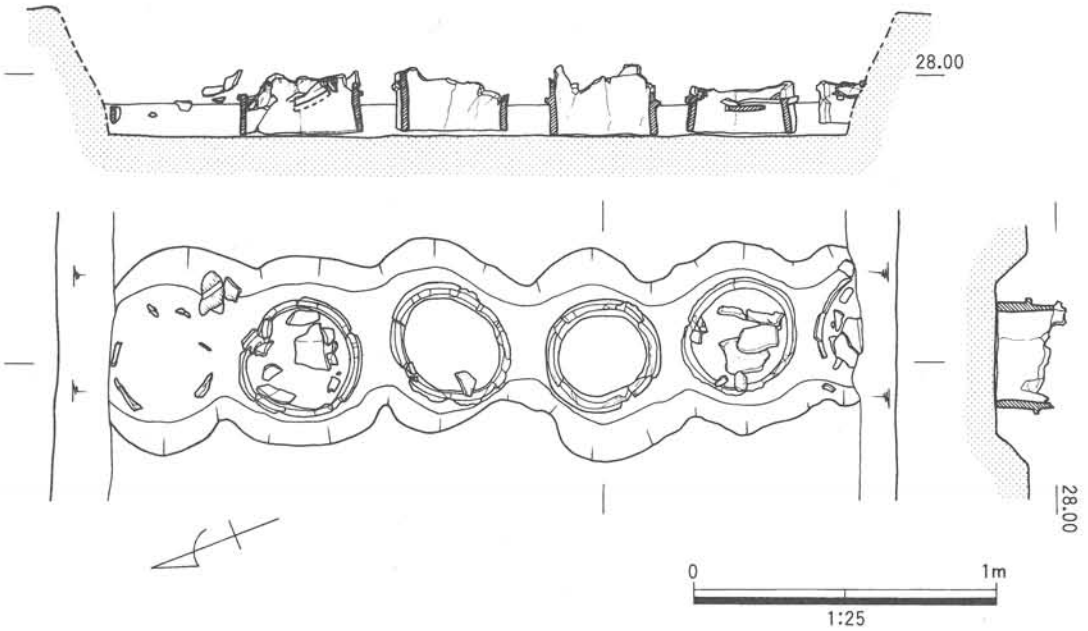


図2　内堤西側円筒埴輪列出土状況

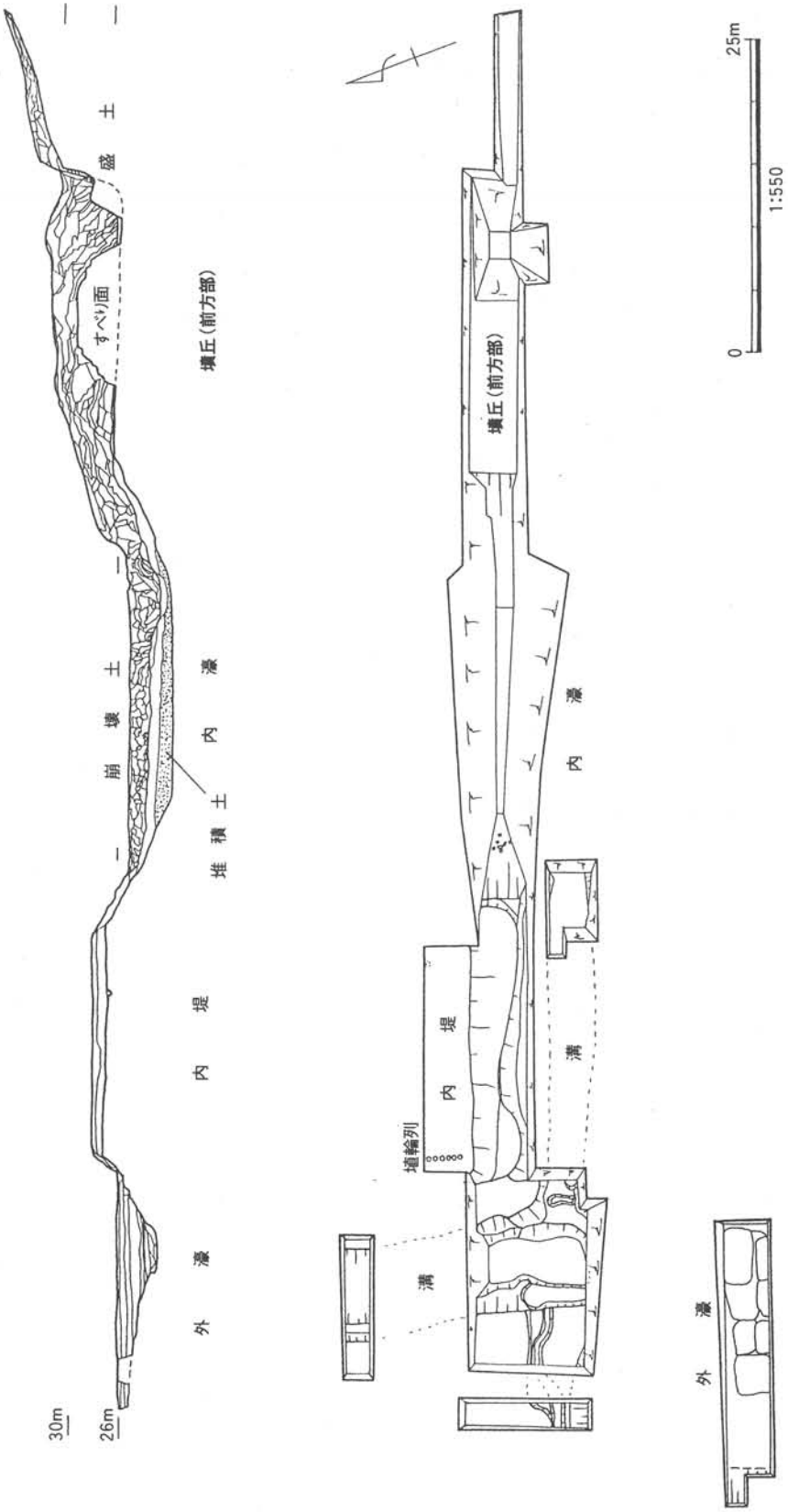

盛土
すべり面
墳丘(前方部)
崩壊土
堆積土
内濠
内堤
外濠
30m
26m
墳丘(前方部)
内濠
埴輪列
内堤
溝
溝
外濠
0
25m
1:550

図3　土層模式図・平面図

小　結

今回の第４次調査では今城塚古墳前方部の状況や内堤、内濠と外濠の規模について新たな知見を得ることができた。

前方部と内堤では古墳時代の地表を確認したことにより、西から東へと緩やかに傾斜する旧地形がより具体的に追求でき、墳丘はすべて盛土によって築かれた可能性がより高まった。

前方部は、現況がいわゆる剣菱型となっているが、裾端部の位置や盛土・崩壊土の状況からすれば、本来は一直線にのびることが確認できた。さらに、過去の調査結果とあわせてみると、これまでの調査結果による後円部東側の墳丘基底面と今回検出した前方部基底面の距離から、墳丘裾部分の全長190mが確定した。

内濠は底の標高が約21.5mで後円部側の標高21mとの比高は0.5mであり、現地表面での比高が約５mであるのに比して少ない。泥土層は低位にある後円部側で厚いため、水面高は前方部・後円部とも本来同じであり、内濠は途切れずに一巡していたと考えられる。また、１～３次調査でみられた人為的な埋め戻しはなされていない。

前方部と内濠で確認した盛土・埋土は地山との境で地滑り痕をとどめるうえ、盛土に大小多数の亀裂が縦横に延びていた。これは、調査区での盛土全体が崩壊しつつ東から西へ一気に移動する、地滑りの典型的な状況を示している。今回の大規模な地滑りの原因は地震と考えられ、今城塚古墳築造以後にこの地滑りにみあう規模の地震としては、1596（文禄５）年９月５日に発生した伏見地震があげられる。

今城塚古墳の盛土が一瞬に崩落したのは築城時の大規模な改変などによって墳丘の劣化が進行したところに地震という大きなエネルギーが瞬時に加わったためであろう。

高槻城三ノ丸跡の調査

宮崎康雄

高槻城は、京都と大阪のほぼ中間にあって、北方約1kmに西国街道を控え、南方約3kmに淀川をのぞむ、交通の要衝に位置している。城は、芥川の形成した標高5～10mの扇状地末端に築かれた平城である。ここに本格的な城郭が築かれたのは和田惟政が入城した永禄年間（1569年頃）とみられ、天正年間（1573年頃）にはキリシタン大名として有名な高山右近が城主となり、町家をも取り込んだ広大な城を築いたといわれている。のち元和三年（1617年）には江戸幕府による大規模な改修が行われ、高石垣と土居がめぐる近世城郭として生まれ変わった。

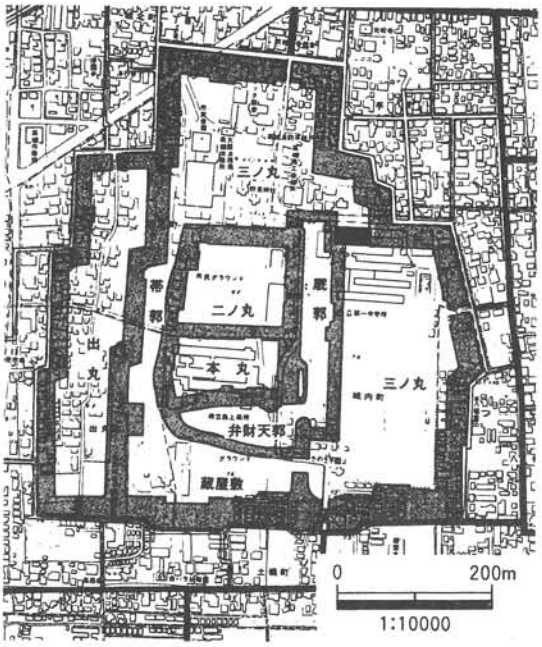


図1　調査位置図

城は明治7年（1875年）に破却され、現在では地名や道路などの町割に当時がしのばれるにすぎないが、近年の発掘調査によって高槻城の実体や和田惟政・高山右近時代の中世高槻城の様子が次第に明らかになってきた。

今回の調査地は高槻城三ノ丸跡東郭地区の北西部にあたる。1988～1991年にかけて東・北・西側隣接地の発掘調査が行われており、近世の外堀の屈曲部と中世の「大堀」の延長部、さらに近世内堀の東辺部の確認が期待された。

検出した遺構と遺物（図版第2・3）

(1) 中世高槻城

1988年北調査区で検出した南北方向の「大堀」が、調査区中央部で東に屈曲し、東西堀となって東側へつづいていることが判明した。また屈曲部は西側へ短く突出しており、調査範囲では逆T字形を呈している。西側突出部は1991年西調査区の状況からして内堀の範囲内でおさまり、最大長20m程度と考えられる。「大堀」の幅は南北堀・東西堀ともに約24m、西側突出部は幅約14mと想定される。堀底の標高は約4.9mをはかり、植物遺体を含む堆積土が厚さ約0.5m認められた。堀斜面はいずれも直線的に掘削され、斜面角度は約35度である。

遺物としては南北堀堀底から漆器椀、上層から16世紀代と考えられる美濃焼の皿片が出土した。

また、調査区南側では溝1を検出した。横断面は逆台形を呈し上縁で幅約3m、深さは検出面から約0.3mをはかる。溝内堆積土から、15世紀後半～16世紀の土師皿と備前焼の擂鉢、15世紀後半の土釜等が出土している。この溝は1988年東調査区で検出した溝2の延長部分とみられ、さらに西側へのびていると考えられる。

(2) 近世高槻城

a．外　堀

東西方向の外堀が、北へ屈曲する隅部を検出した。中世「大堀」との位置関係をみると、屈曲部以東(東西堀)は「大堀」の東西部とほぼ重なり、屈曲部以北(南北堀)は「大堀」南北部から東へ約25mずらして設定され、新たに掘り直されている。そのため外堀掘削に先だって、競合する部分の「大堀」堆積土を除去し、木組みを内包した幅約10mの土堤状の護岸施設を設けて外堀西辺を築造していることが判明した。

また外堀斜面上方では護岸の杭列を検出した。外堀斜面の傾斜角は杭列上方が約15度、下方が約30度で、「大堀」にくらべて緩い。外堀の幅は、東西堀約30m・南北堀約30mに復元される。

遺物としては外堀堆積土から漆器椀、卒塔婆、鉄砲玉、陶磁器・瓦片などが出土した。

土堤状護岸施設　土堤状護岸施設は、推定幅約10m・高さ約1.8mをはかり、中央部に幅約2.4mの木組みを設置して、その西半（郭側）は礫まじりの粘質土、東半(堀側)は俵土嚢を5～8段積みあげて築かれている。俵土嚢は稲藁を編んだ俵に砂利まじりの粘質土を充填したもので、縦50～70cm×横25～40cm、厚さ20cm程度をはかる。

木組みは、加工木材を組み合わせた方形枠を、南北方向に1列3単位検出した。方形枠は下端を尖らせた丸太材（径約15cm・長さ約210cm)ないし角材（20cm角・長さ約260cm）を四柱材とし、10cm

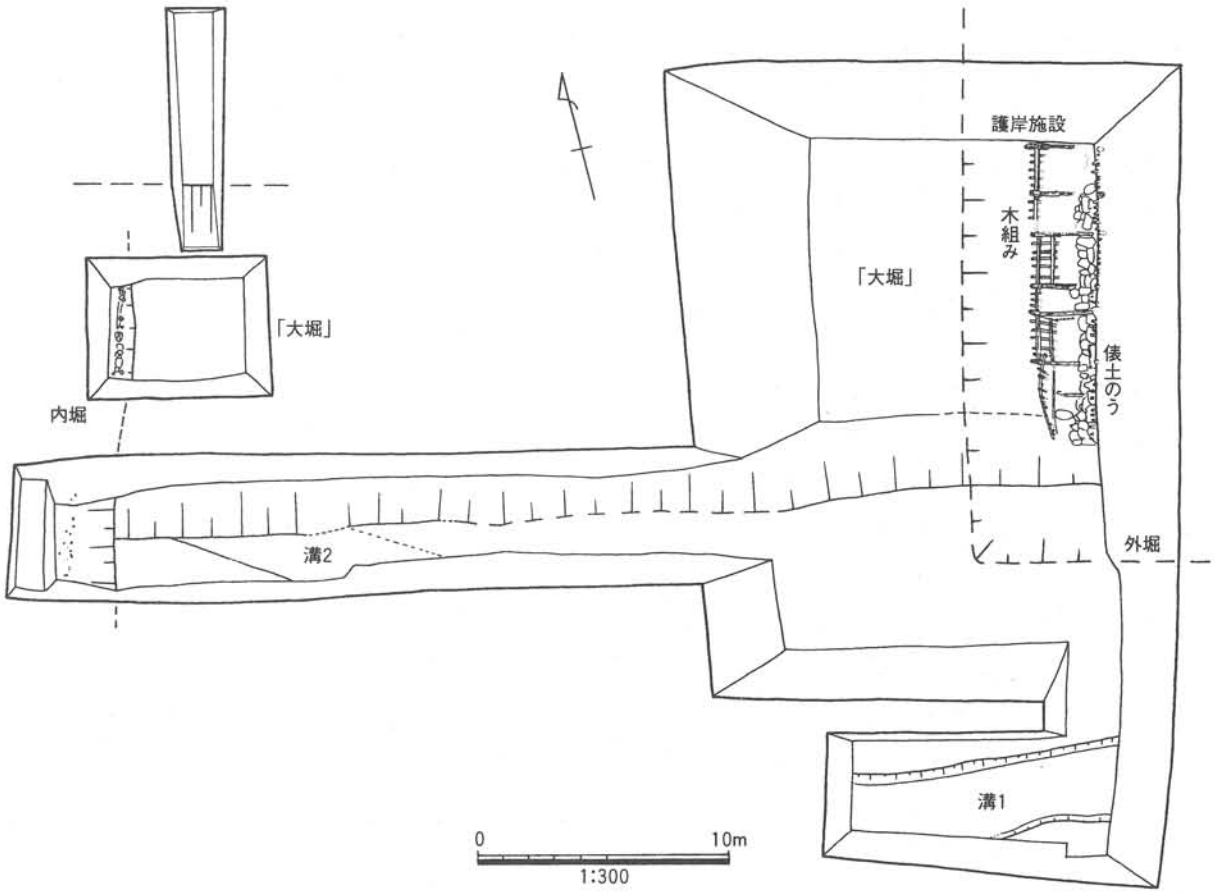


図2　調査区平面図

角の横木（長さ約240cm）を上下に２段、架構したものである。四柱材は郭側へ約30度傾き、東西方向の横木は約１５度の傾斜で堀側が高くなっている。おそらく郭側の盛土重量を考慮して当初から傾けて設置したものと考えられる。四柱材には方形のホゾ穴をあけて横木の長ホゾを貫通させ、とくに南北方向の横木のホゾ先にはホゾ穴をあけて貫栓を打ち込み、固定してある。隣接する方形枠間は上段横木の位置で径５～10cm・長さ160～380cmの丸太材で連結され、さらに連結材と方形枠横木に沿わせて郭側に径10cm・長さ200cm程度の丸太杭や角杭を約0.3m間隔で打ち込み、縄で緊結して木組み全体を強固に固定していた。また外堀の南西隅部では、連結材は方形枠郭側上段横木の堀側にあり、杭も堀側に打ち込んでいた。四隅の柱や横木には「△」など上下の位置や方向を示す墨書が認められた。

こうした状況から、おそらく中世の「大堀」底を浚って0.8～１m間隔で方形枠を仮組みしたのち四柱材を打ち込んで据え、それらを連結して強固に固定し、外堀側に俵土嚢を積んで外堀斜面をつくりつつ、郭側から粘質土砂や粘土塊を寄せて締め固めながら、郭・土居の基礎部分となる土堤状護岸を形成していったものと考えられる。土砂の投入は、木組み構築と並行して、その作業面を形成するように行われた可能性がある。なお俵土嚢は、外堀側に積み上げられたもののほか、「大堀」南端の木組み西側でも２個、それを貫き止めた杭とともに見つかっている。

b．内　堀

中世の「大堀」西側突出部と直交するかたちで、三ノ丸と厩郭・二ノ丸を分かつ内堀の東辺を検出した。1991年西調査区で同西辺を検出しており、内堀幅が約18mであることが確認された。

内堀側では、外堀とは異なり、木組みは検出されなかった。「大堀」西側突出部をいったん埋め戻し、断面カマボコ状の土堤を形成してから掘削したと考えられる。内堀斜面の傾斜角は約40度をはかる。内堀斜面上方では、明治時代初頭と考えられる小規模な杭列及び石組みの護岸施設を検出した。石材には矢穴があり、城石垣石の転用の可能性もある。

遺物としては、陶磁器・瓦片が内堀堆積土から出土している。

まとめ

今回の調査では、中世高槻城の「大堀」の規模・形状、ならびに近世高槻城の外堀の縄張り、築造方法などの一端を明らかにすることができた。

中世「大堀」は、1988年の発見段階で一気に埋め立てた埋土の状況から、高山右近時代のものと推定していたものである。今回深さ約４m、幅約24mをはかる大規模なものであることがあらためて確認された。イエズス会宣教師の報告『耶蘇会士日本通信』天正七年（1579年）十月付け書簡に記載のある、織田信長が攻めあぐねた「水の充ちたる広大なる堀」に対応するものであろう。

「大堀」が東へ屈曲し、加えて屈曲点に西側への突出部があったことは、中世高槻城に関してはじめて検出した機能的な遺構といえ、「舟入」などの「大堀」を利用した水運の船着き場の可能性も指摘できよう。

つぎに、幕府主導による元和三年（1617）修築にかかる近世の外堀については、木組みを用いる護岸の工法が明らかになった。外堀が中世の「大堀」をなぞるように設定されたため、外堀開削にあたって方形枠を用いて強固な基礎を築いて「大堀」を埋め戻しつつ、堀斜面を形成したものである。

類似の工法として、狭山池の中樋・西樋両翼の堤体基礎部分で確認された木製枠工がある。堤体の円弧滑りを防止するための護岸施設とみられており、前後列の丸太を横木で上下２段結合した木組みを

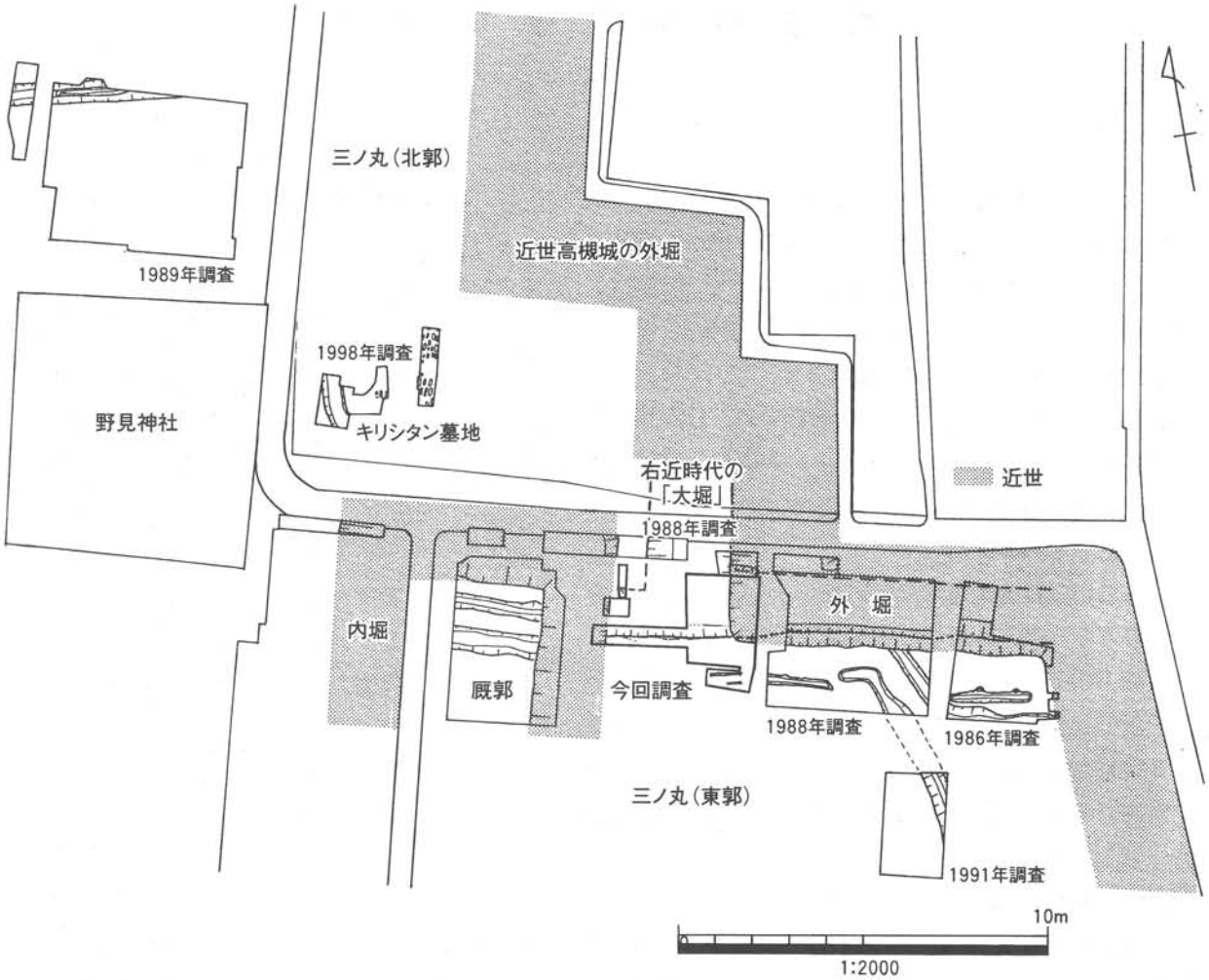


図3　周辺遺構配置図

前列の横木１段で連結していく形になっている。高槻城の場合は、４本の丸太を前後左右２段の横木で結合した枠ーいわばユニットを連結する形になっていて、任意の場所から同時着工でき構造もより堅固に仕立てられている。狭山池の樋改修工事は慶長十三年（1608）に行われており、高槻城の方形枠は時期的にもその発展形と位置付けることができる。類例の増加に期待したい。

また外堀の屈曲部以東は、「大堀」を利用しつつ堀幅を拡張したとみられる。前代の城郭を跡形なきまでに改造する指向は元和六年の大坂城大改修にも見受けられるところだが、高槻城修築にあたっては基本的な城の縄張りを踏襲していることがうかがえ、中世高槻城の規模・構造を考えていくうえで重要な成果となる。

時代が中世から近世へと大きく移るなかで、高槻城が戦略的拠点から政治的拠点へと移行していく実態を究明する貴重な手がかりを得ることができた。

なお、現地調査は主に文化財専門員　難波紀子（当時）が担当した。

古曽部焼窯跡の調査

橋本久和

俗に「遠州七窯」の一つと伝えられる古曽部焼は、高槻の誇りうる文化遺産であり、幕末・明治を通じて栄えた高槻の数少ない地場産業である。古曽部窯は、古曽部村の五十嵐新平が京都の清水で修行し、帰郷後に開窯したと伝えられる。寛政９年（1797）に古曽部に窯を開く際、藩に提出した免許願いの一札が残されている。この時期は京・大坂市中の家庭に陶磁器の使用が浸透し、製品の質や流通組織が大きな変化をむかえたといわれる。

古曽部窯は五十嵐家以外に窯がなく、陶工も当主を中心とし、職人も数少ない。幕末から明治にかけて、大坂市中や枚方・伏見などの料理屋の盛行で需要が飛躍的に増大し、注文書などが残されている。明治末の４代目信平の時に廃窯となり、窯自体は五十嵐家の屋敷内に昭和20年代まで存在していた。なお、廃窯時期については大正とする説もある。

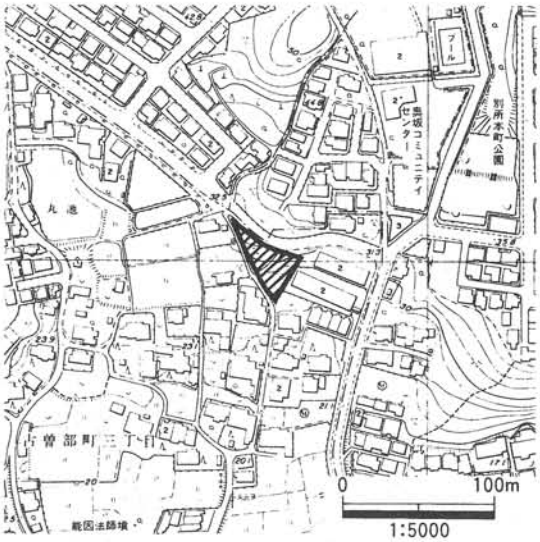


図1　調査位置図

窯跡の調査（図版第４）

今回の調査は、古曽部町三丁目で計画された都市計画道路の建設に先立って実施した。調査地は古曽部丘陵の麓で五十嵐家に隣接し、破損品などを廃棄した場所とされていた。周辺は宅地開発が進み、竹林として残る部分を調査した。表土除去の段階から多量の陶片が出土し、物原であることを示していた。

陶片などの堆積層を除去した地山をみると、南側に伸びる丘陵斜面の西南裾であることが分かる。西側は斜面が続き、南側は一旦平坦面となり、さらに南に下がっていく。調査区の北端で不定形の落ち込みが検出され、破損した陶片や窯道具で隙間がないように埋っていた。焼製不良品の窯だし直後の廃棄坑とみられる。

調査は物原の遺物を層位ごとに取り上げることが中心になった。

調査区の西側斜面と東壁の断面図を作成したが、①・②層は昭和40年代に隣接する市道が拡幅された際に整地されたものである。③層が表土直下に相当する。北側の斜面上部から投棄されて堆積した層であることが分かる。

④・⑤・⑥・⑦・⑧層から陶片や窯道具が出土する。④・⑤層からの出土が最も多く、焼土や窯体片も含まれている。⑥層からは殆ど出土せず、⑦・⑧層も比較的少ない。④・⑤層は不良品や破損品を一時に廃棄した印象が強い。⑦・⑧層は焼土も含まれるが窯から掻き出した灰層という印象を受ける。ただし、調査区北側の丘陵斜面には当調査区同様に破片や窯道具が散乱しているが、窯跡の存在は確認されていない。

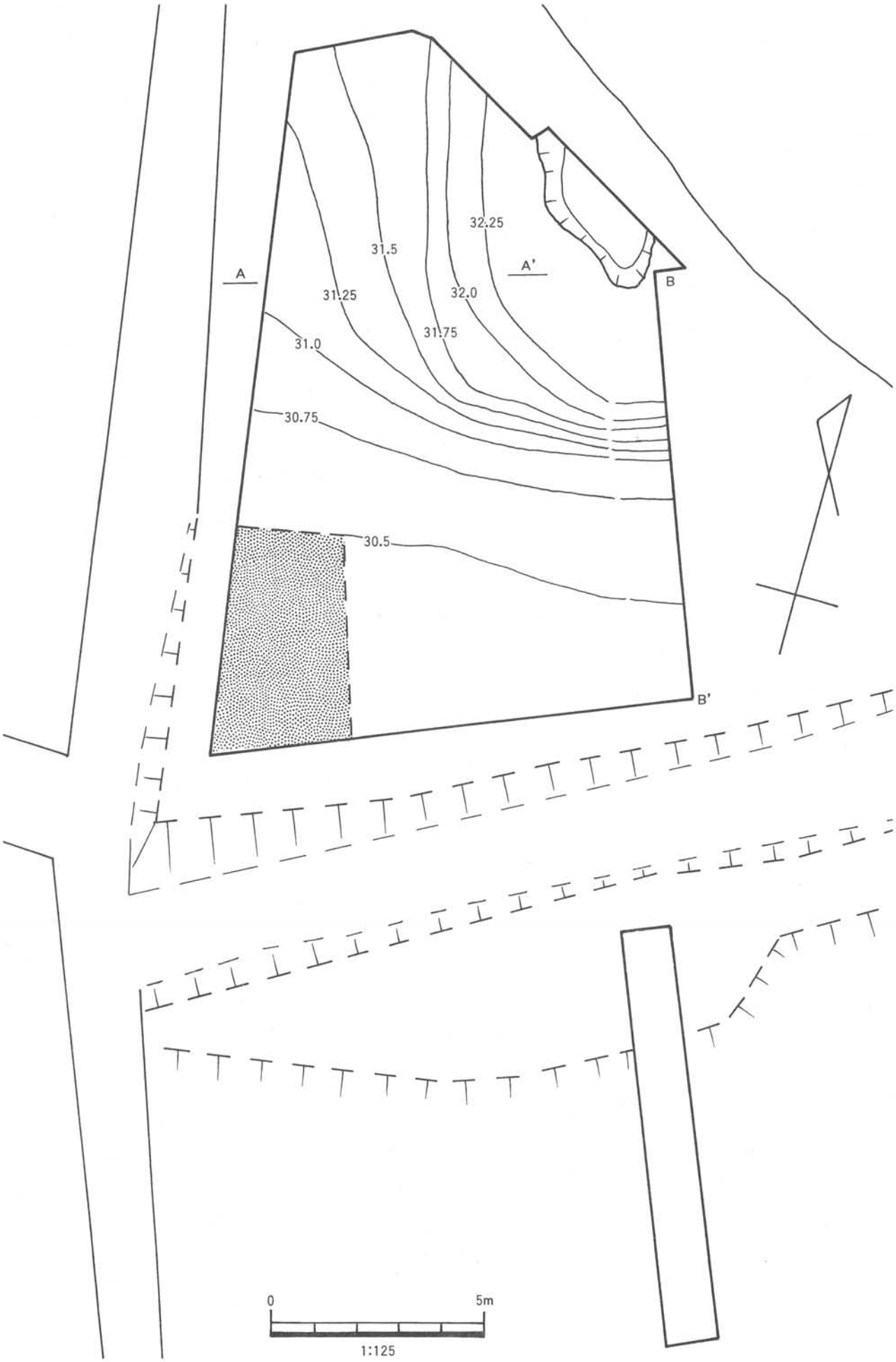


図2　調査区全体図

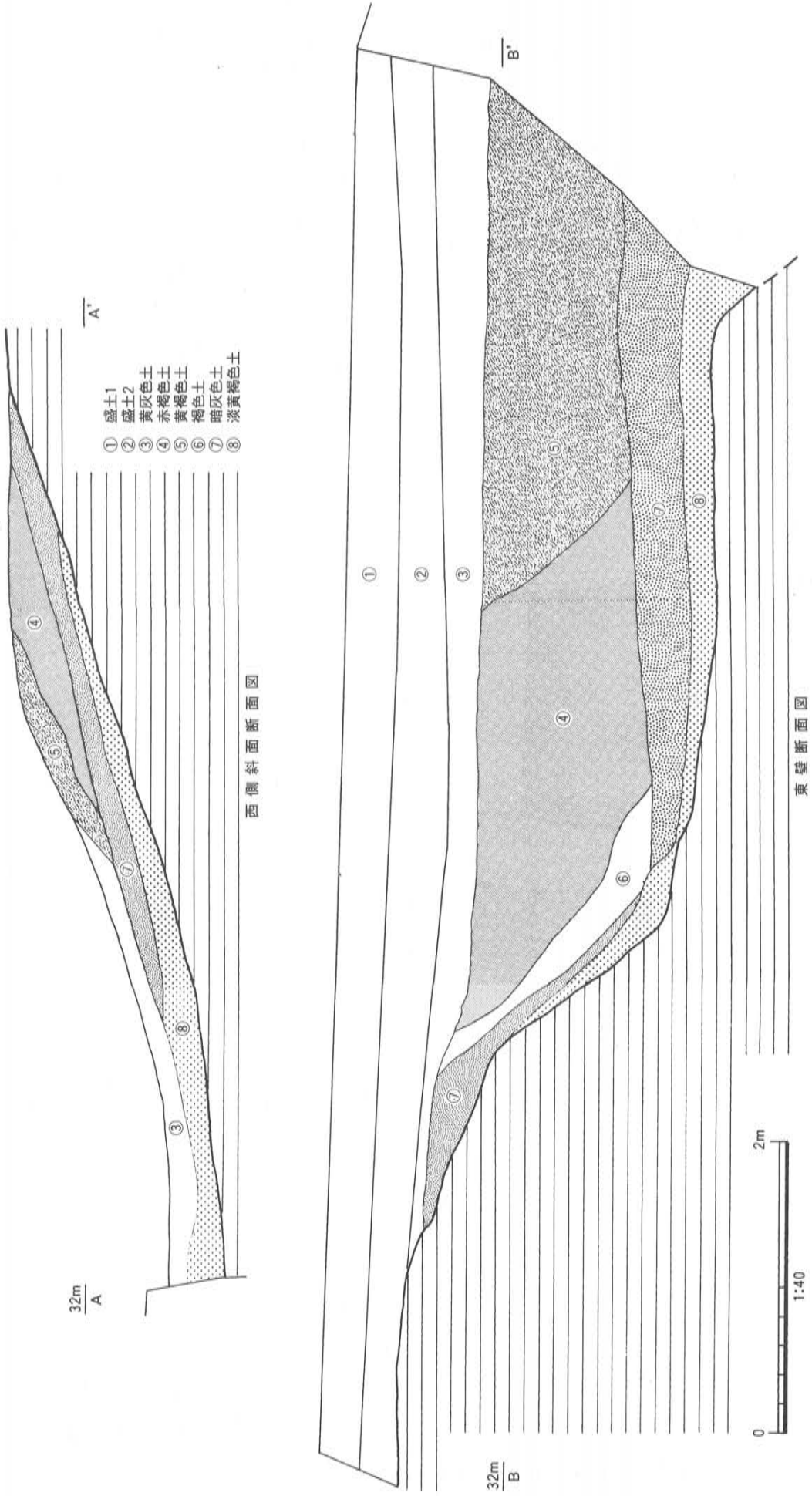

32m
A
A'
① 盛土1
② 盛土2
③ 黄灰色土
④ 赤褐色土
⑤ 黄褐色土
⑥ 褐色土
⑦ 暗灰色土
⑧ 淡黄褐色土
西側斜面断面図
32m
B
B'
東壁断面図
0
2m
1:40

図3　灰原断面図

出土遺物（図版第５・６）

出土した遺物はコンテナに約300箱で、洗浄作業まで終了した。陶片と窯道具が大半であるが、肥前系の陶磁器や産地不明品も出土し、古曽部焼とそれ以外を選別する必要がある。また、層位ごとの出土遺物に差異があるのかどうかという点も検討課題である。陶片には何代目かを示す「古曽部」銘の印が相当数あり、これらを手がかりに今後作業を進めていきたい。

おもな出土遺物には、飯茶碗・徳利・土鍋・急須・鉢・手塩皿・ちりれんげ向付・植木鉢などの日常雑器と、菓子鉢・煎茶茶碗・抹茶茶碗・茶托・水指などの茶器類がある。なかでも、内面に海老を描いた染付の「海老皿」・煎茶椀・三島写しの皿や鉢がめだつ。瓶や火鉢など大型の製品は殆どみられない。型づくりの行平や急須の把手には「古曽山」の銘がみられ、「くらわんか」と押印された破片も少数出土している。また、将棋の駒や双六・人形などの遊戯具、箆先で「古曽部　施主　五十□」と刻された陶片や表面に「味自慢　塩昆布」と白釉で描かれた蓋もある。建築部材として小型の軒丸瓦があり、周辺の民家にも施釉された瓦が使用されているため実用品として生産されたものであろう。

匣鉢やハマ・トチンなどの窯道具も多数出土している。なかには陶片の溶着したものもあり窯道具の具体的な使用方法が分かる。釉薬をつくるための乳鉢や棒、型なども出土している。

まとめ

これまで古曽部窯跡では個人住宅の建設に先立つ小規模な調査が実施され、窯道具などが採集されていた。今回の調査では、陶片や窯道具などが大量に出土し、古曽部焼の器種組成や生産形態を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。「古曽部」と押印された多数の陶片が出土しているが、その大半が３代と４代の銘である。３代信平は幕末の嘉永年間から明治初期、４代信平は明治時代に作陶活動を展開し、近郊の消費地に供給された。その際の注文書と出土遺物との対比作業も今後の重要な課題である。

最近、近世遺跡の調査が各地で実施されるようになったが、今のところ消費地における古曽部焼出土の報告に接することはない。唯一、平成８年度に実施した高槻城三ノ丸跡（高槻警察署構内）の調査において、「古曽部」と押印された行平など数点の出土が確認されている（高槻市教育委員会1998年『高槻市文化財年報平成８年度』）。

なお、枚方市宇山町の宇山遺跡第３次調査で近世末から近代初めとする２基の窯跡が調査され、「古曽山」と型押しされた行平の把手が出土している（枚方市文化財研究調査会1989年『枚方市文化財年報Ⅸ』）。古曽部窯の模倣か古曽部窯から分かれた職人によるものか即断できないが、同時期に操業した小規模な地域窯の存在を示している。

古曽部焼の研究は個人蔵の資料などをもとに民俗・美術史的な観点から実施されてきた。今後は調査資料も加えて、生産の実態と流通面からも検討していく必要がある。

安満山古墳群萩之庄支群Ｃ１号墳の調査

鐘ケ江　一　朗

調査地は高槻市大字下539地内にあたり、小字名は檜尾と称する。平成12年秋から着手された高槻市公園墓地整備工事中に鉄刀２点を発見、古墳の存在が判明して発掘調査を実施した。

古墳は、安満山中腹の急峻な南向き尾根の標高87m～90m付近に位置する。北側は主尾根の急斜面、西・南側は深い開析谷につづく急斜面で、わずかに東南側は尾根先端との間に東向きの比較的緩やかな斜面がひろがっている。南東側の谷筋は萩之庄方面へ開いていることから、安満山古墳群の萩之庄支群へ含めてＣ１号墳と呼称する。調査範囲は東西15m×南北15mである。

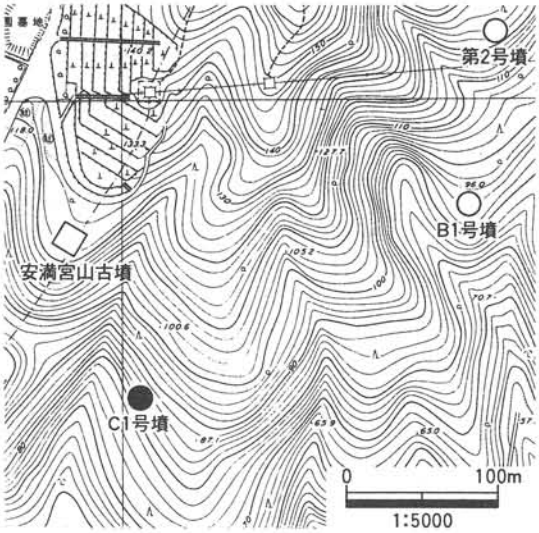


図1　古墳位置図

調査の結果、木棺直葬の埋葬施設(主体部)をそなえた小規模な長方形墳１基を検出し、主体部から金環、剣・刀・鏃等の鉄製品、ガラス小玉などの副葬品が、墳丘・周濠内から埴輪・土師器・須恵器などが出土した。

遺構・遺物（図版第７）

墳　丘　古墳は主尾根の鞍部地形を利用して築造されている。築造後、東側は最大厚1.6mに達する大量の土砂が流入して谷地形を埋める一方、墳丘西半は開析谷へ流出していた。

墳丘部の基本層序は表土0.05m、黄褐色土<流土>0.1～0.2m、以下墳丘を構成する淡赤褐色ないし黄灰色系礫混じり土の盛土層0.6mとなり、主体部西側はただちに灰白色～灰緑色泥岩の地山となる。盛土は周囲から内側へ向かって、層厚0.15m平均でほどこされていた。一方、主体部東側では、墳丘盛土下に黄灰色礫まじり土0.1～0.2mを介して弥生時代後期の遺物包含層・炭まじり淡褐色土0.15mが検出され、明黄灰色礫まじり土の地山となる。古墳の東側斜面はこの包含層を削って形成されていた。

古墳の南北は尾根背梁部を開削して周濠を設けているが、東側は谷部へ墳丘斜面を延長し、祭祀場を設けていた。北周濠は幅3.5m・深さ0.6m・斜面長約1.6m、南周濠は幅3.7m・深さ0.6m・斜面長約2.1mをはかる。これに対して東側斜面は比高差約1.5～3.2m、斜面長約3.3～4.5mに復元される。西側は開析谷斜面が迫り、岩盤が露出していて周濠はめぐっていなかった可能性が高い。長軸上での墳丘復元長は12.5mである。

墳頂部は東西５m×南北９mの南北に長い隅丸長方形に復元される。墳頂部の標高は90.0m、周濠底は北側89.2m、南側88.7m、東～南側斜面裾88.2～87.0mをはかる。

埋葬施設　古墳長軸と平行して１基検出した。墓坑は全長4.05m、北端幅0.6m・南端幅0.5m、深さ0.3mをはかり、横断面は浅いＵ字形を呈する。坑底高は北側が標高89.12m、南側が同89.02mをは

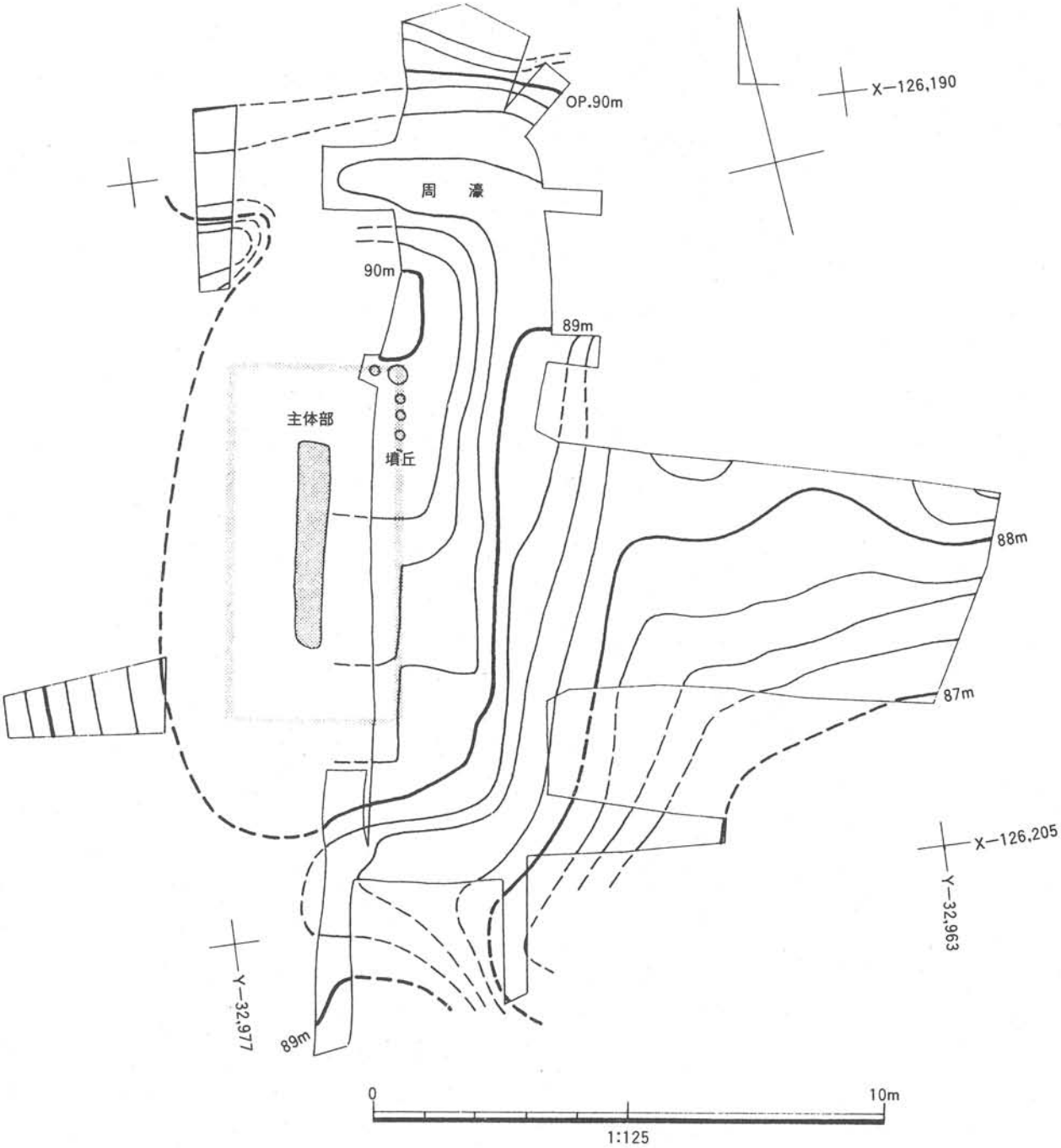


図2　地形測量図

かり、南側が0.1m低い。主軸方位はN－16度－Eである。南側0.15mをのぞく墓坑底全面に赤色顔料が認められ、北端から0.4m地点では幅0.06mの赤色顔料の高まりがあった。北小口板の痕跡であろう。粘土床や被覆粘土は認められず、長さ3.9m・最大径0.6m程度の割竹形木棺を直葬したものと考えられる。

副葬品は、小口板痕跡の南1.85m地点の坑底で、棺と直交方向に鉄剣・鉄鑿各1点、2.2m地点で金環1点、2.8～3.3m地点の坑底中央～西壁へかけて濃紺のガラス小玉102点以上が一部連接状態をとど

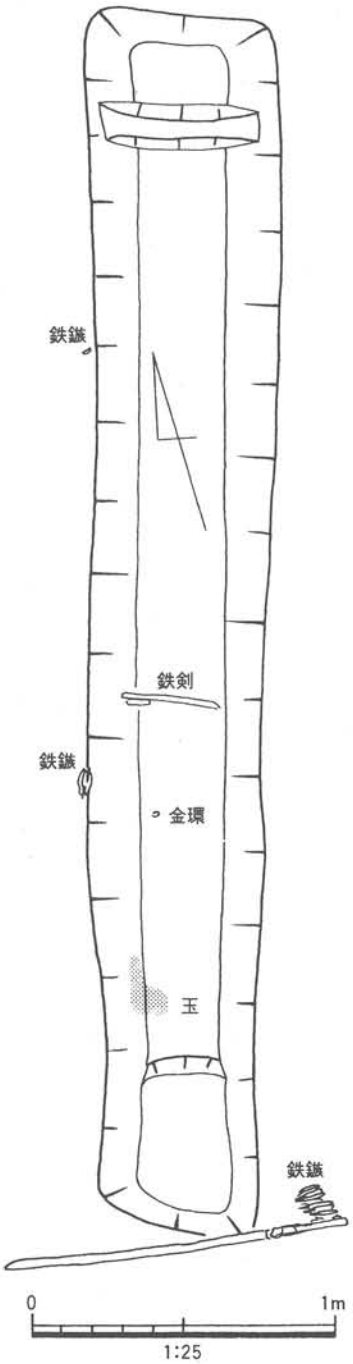


図3　埋葬施設遺物出土状況図

めて出土した。以上は棺内埋納とみられる。また墓坑に接して、西側２箇所から棺と並行に先端を北にして鉄鏃６点、南端部から棺と直交方向に重ねて置かれた鉄刀の茎部２点、鉄鏃40点以上が出土した。当初発見された鉄刀のうち１点は下側の茎部と接合し全長97㎝程度、他の１点も同規模に復元される。本来、南側の武器類は切先を西、刃を北にして上下に重ねた状態の刀２点と、刀の北側に先端を東にして束ねた状態の矢を約40本、棺設置後に置いたものと考えられる。これらは棺外埋納とみられる。

盛土や副葬品の出土状況から、墓坑に棺身を据えたのち、盛土で覆って墳丘を構築したと考えられ、棺外西側・南側の武器類は棺が露出している段階での副葬とみられる。墓坑の形状等から、遺体は北枕に納められ、棺内の副葬品は足元に置かれたものであろう。

埴輪列　墓坑北西側の墳頂部から原位置で埴輪列を検出した。埴輪列はＬ字形に検出され、北東隅に径35㎝の円筒埴輪、その西に１個、南に４個、いずれも径18～20㎝の小形円筒埴輪を認めた。主体部を取り囲むように20～25㎝間隔で小形円筒埴輪をめぐらし、要所に普通円筒を据えたものとみられる。主体部との位置関係から、東西３ｍ・８個×南北７ｍ・18個の埴輪区画が復元でき、総数50個程度と想定される。

周　濠　北周濠・南周濠とも、東半部で幅3.5ｍ・深さ0.6ｍをはかる。それより西側は地山が岩盤に移行し、周濠底は上昇して深さ0.3ｍ以下に減じている。東側は地形に沿って下降し、東側～東南隅部では斜面裾に幅1.5ｍ・深さ0.2ｍ程度の浅い溝をめぐらせていたと考えられる。周濠底には炭まじりの淡褐色砂質土が厚さ0.15ｍ程度堆積し、埴輪片や須恵器片があわせて整理箱３箱程度出土した。

埴輪類は大半が薄手・横ハケの円筒埴輪であり、表面にベンガラをほどこしたものもみられる。形象埴輪としては家とみられる破片が数点ある。須恵器は北周濠から器台片、東周濠南部～東南隅部にかけて壺と器台片が少量出土した。器台は別個体だがともに高杯形である。隅部のものは杯部にコンパス文を３段ほどこし、脚部は方形透かし孔を穿っている。そのほか土師器の甕もしくは器台とみられるものがある。

埋納遺構　北周濠東部の濠底で、ヤリガンナ３点と鑿１点、砥石１点がまとまって出土した。掘形が明確でなく明らかに墓坑に伴うものとは判断できず、径0.5ｍ・深さ0.2ｍ程度の小坑を穿ち工具類を納めた、祭祀に関わる埋納遺構と考えられる。

祭祀遺構　古墳東側の谷部には東西５ｍ×南北４ｍほどの平坦地があり、その中央付近で南北1.9ｍ・東西1.2ｍの範囲に厚さ0.02ｍの炭層と薄い焼土層のひろがりを認めた。周囲からは小ピットが数個検出された。埋土は炭片をまじえ、建物としてのまとまりをもたない。中央の炭層から埴輪片、南

側の谷部から杯部に突線のみをほどこした須恵器の器台片が出土した。谷最奥部を開削して古墳裾に設けられた、墓前祭祀の遺構と考えられる。

年代等　出土遺物類からみて、５世紀前半の早い時期の築造と推定される。

弥生時代包含層　古墳東側の墳丘下から東側の谷地形にかけて、厚さ0.15m程度の炭混じり淡褐色土層を検出した。層中から鉄鏃１点・弥生時代後期の土器片数点が出土した。同層は階段状に南・東へ下降しつつ、東側谷部の祭祀遺構を検出した平坦部へつづいていた。調査区内では明確な遺構は検出しなかったが、古墳東南側は東向きの緩斜面がひろがり平坦部が階段状に複数認められる。弥生時代後期の高地性集落が古墳付近から谷部にかけて存在していた可能性が高い。

小　結

安満山古墳群萩之庄支群は、安満宮山古墳の東方尾根上に位置する。今回の調査では、安満山山塊においてはじめて５世紀代の古墳を確認し、一帯が古墳時代を通じて地域首長層の墓域であったことがあらためて認識された。

今回明らかになったＣ１号墳は、木棺直葬を主体部とする小規模な長方形墳で、盛土は低いながらも尾根脊梁部の地形を巧みに利用し、東南側からみれば高さ３ｍを越える墳丘に仕立てている。墳丘東南側には器台が置かれ、古墳東側では墓前祭祀が行われたことをあわせみると、東の谷筋が墓道にあたり、東南方からの眺望を意識して築造された古墳と考えられる。縦横比２：１に近い長方形墳ではあるが、東南側平野部からは存在感のある墳墓にみえたことであろう。築造時期や墳丘規模から、先行する安満宮山古墳・萩之庄支群Ｂ０号墳との関連が注目されるところであり、今後の課題となる。出土遺物については、全長１ｍ近い直刀をはじめとする鉄製武器類が特筆される。棺内外の副葬品出土状況は、埋葬の手順を考えるうえでも重要な資料となる。

なおＣ１号墳の占地については、南方約50mが主尾根先端部にあたり、眺望のうえでは優位にある。そのため今回、再度確認調査を行ったが、結果は表層の腐食土直下で比較的堅緻な岩盤を検出し、遺構・遺物とも検出しなかった。おそらく安満宮山古墳に対する前山のように、眺望上有利な場所であっても掘削等がままならなかったために、現在地に古墳を築いたのであろう。

神内遺跡の調査

橋本久和
高橋公一
木曽　広

神内遺跡は高槻市の最も東部にある遺跡で、島本町桜井に隣接している。この地域の地名である、神内（こうない）は「神奈備（かむなび）の森」が語源である。「かむなび」とは、「神の宿りますところ」という意味で、このような地名は日本各地にみられる。なかでも神内付近は京都から太宰府など西国地方へ赴任する貴族などが、肉親や友人との別離の地として知られ、「古今集」や「新勅選集」には別れの歌が載せられている。また、この地域は物資流通を支えた山崎津（京都府大山崎町）や水無瀬離宮などにも近く、古代・中世には京都近郊の文化や社会・経済の影響を強くうけたが、高槻市東端で、埋蔵文化財の調査が少なく、遺跡や遺物はほとんど知られていなかった。

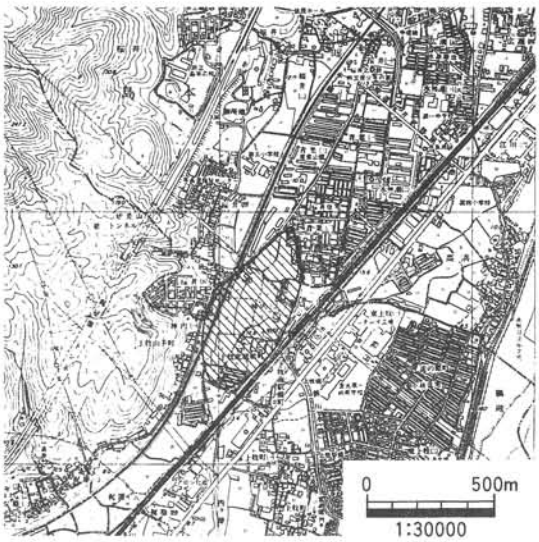


図1　遺跡位置図

阪急上牧駅の北側、高槻市神内二丁目・上牧北駅前町地内が区画整理されることになり、平成７年１月に範囲確認調査を実施したところ、事業予定地全域で遺構・遺物が確認されたので、平成11年２月から平成12年９月30日まで、20,020m²について発掘調査を実施した。

なお、調査区は南側からⅠ区、中央部をⅡ区、北側をⅢ区とした。

遺構・遺物（図版第８～12）

(1) 縄文時代

明確な遺構は検出できなかったが、Ⅰ区とⅡ区から縄文時代後期の土器が出土した。土器の多くは、貝などの工具で表面を削って器壁を薄くした粗製の深鉢で、茶褐色で雲母が混じっている。このような土器は、生駒山西麓で生産され、運ばれてきたものとみられる。

(2) 弥生時代

竪穴式住居、方形周溝墓群、溝などが一定のまとまりをもって検出されている

竪穴式住居　直径約９ｍの円形竪穴式住居１がⅡ区北西部で検出された。幅0.1ｍの側溝が周り、中央に炉跡がある。方形周溝墓が築かれる以前のもので、弥生時代中期前半（摂津第Ⅱ様式）と考えられ、石製穂摘具も出土している。

方形周溝墓　Ⅱ区とⅢ区から20基の方形周溝墓（以下周溝墓とする）が検出された。数基ずつが溝を共有したり溝を接したりして、ひとつのグループを形成している。Ⅱ区で２グループ（A群・B群）、Ⅲ区で１グループ（C群）が確認された。いずれのグループも調査区の西側にさらに

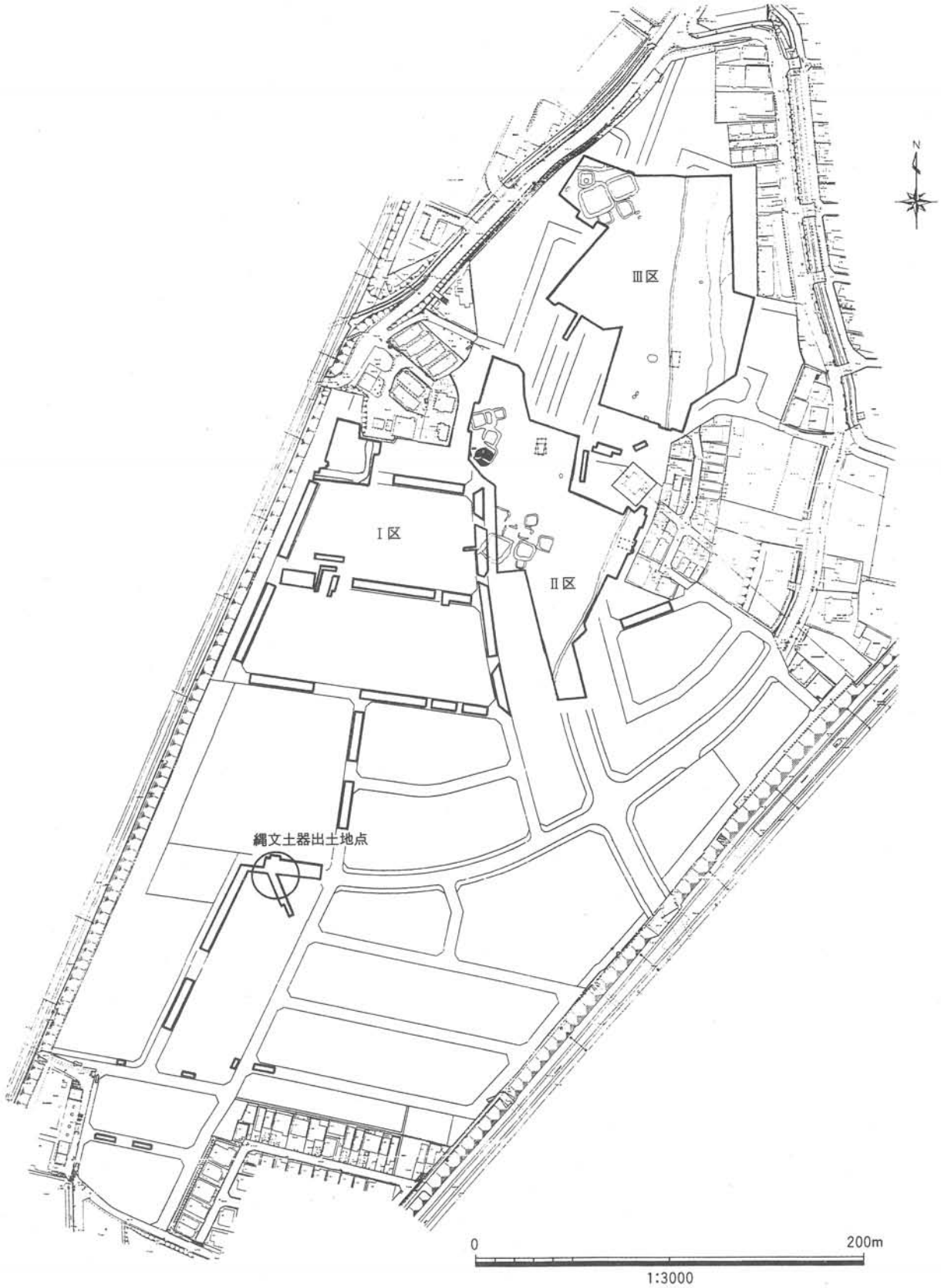


図2　調査区全体図

拡がっていることが確認され、総数はかなりの数にのぼるらしい。

埋葬主体は確認できなかったが、周溝が一辺10m以上の大規模なもの、一辺７～８m程度の中規模なもの、一辺５～６m程度の小規模なものがある。周溝内からは供献土器が出土し、弥生時代中期前半（摂津第Ⅱ様式後半）に属するものが中心である。

A群は一辺が10m以上で、幅２～３m・深さ１m以上の溝に囲まれた１号・２号周溝墓の北側に小規模な３号・４号周溝墓が接していた。その東側には一辺約８mで、中規模な５号周溝墓を中心に小規模な６号～９号周溝墓が溝を接するようにならんでいた。

B群は10号周溝墓の東側に小規模な11号周溝墓が接し、南側に中規模の12～14号周溝墓が溝を接しながらつづいている。10号周溝墓は本来一辺６m程度の周溝墓であるが、東側に溝を付け足して規模を拡大している。

C群は溝を接する大規模な15号・16号周溝墓の周囲に、中規模の17号～19号周溝墓が接している。20号周溝墓は一辺14m以上で、東側に溝を付け足した可能性がある。15号周溝墓は最も大規模で17m×15mを測り、溝幅は約２m・深さは1.6mに達する部分もある。C群は全体として、A群・B群より大規模な印象を受ける。

木棺墓・土坑墓　方形周溝墓C群の周囲とやや離れたⅢ区の南端部で検出された。木棺墓は２基検出され、幅約１m、長さ2.3～2.6mを測り、側板や底板の痕跡が確認できる。素掘りの土坑墓は５基検出され、長さ２m弱・幅約１m・深さは0.5m前後である。供献土器が出土するものもあり、方形周溝墓と同時期とみられる。

溝　Ⅱ区からⅢ区にかけて、長さ300m以上にわたって掘削された溝１は幅約１m、深さ0.2～0.7mを測る。調査区の東寄りまたは中央部に位置し、鋭利な土掘具によって、直線的に掘削されていた。溝の性格としては、北側から南側にかけて緩やかに傾斜していることから灌漑用水路と考えられ、同時に集落の東限を区画したものとみられる。

石器・土器など　遺物包含層などから石器や土器が出土している。特徴的なものとして、石製品には鏃や剣などの武器類をはじめ、斧や錐、穂摘具などの農工具類、叩き石や砥石もみつかっている。このうち、鏃・短剣・錐などの打製石器は二上山で採れるサヌカイトを用いている。完形の短剣は香川県金山産のサヌカイトを用いた珍しいものである。穂摘具は繰り返し使用し、刃や紐を通した孔が摩耗している。石材は滋賀県高島町産の粘板岩や和歌山県紀ノ川流域で産出する片岩を用いている。

この他、石材となるサヌカイトや粘板岩の原石や割ったかけらや未完成品もあることから、遺跡内で石器を加工していたらしい。さらに銅族１点が出土している。

(3) 奈良・平安時代

４棟の掘立柱建物と３基の井戸が検出された。奈良時代が中心とみられるが、遺物包含層からは亀岡市篠窯の須恵器壺をはじめ平安時代の黒色土器なども出土している。

掘立柱建物・井戸　Ⅱ区で３棟、Ⅲ区で１棟が検出された。Ⅱ区では、２間×３東西南北方向の建物が１棟ずつあり（建物１・２）、建物２は１間×２間の建物３と重なるが、前後関係は不明である。Ⅲ区の建物４も２間×３間で、西側に井戸１が検出された。井戸１は直径4.8m・深さ約1.4mを測る。周囲では柵列のようなものは確認されていないが、建物４と井戸１でひとつの屋敷地を形成していたらしい。井戸２は直径2.6m・深さ1.2mの円形井戸で、２段の曲物を井戸枠として

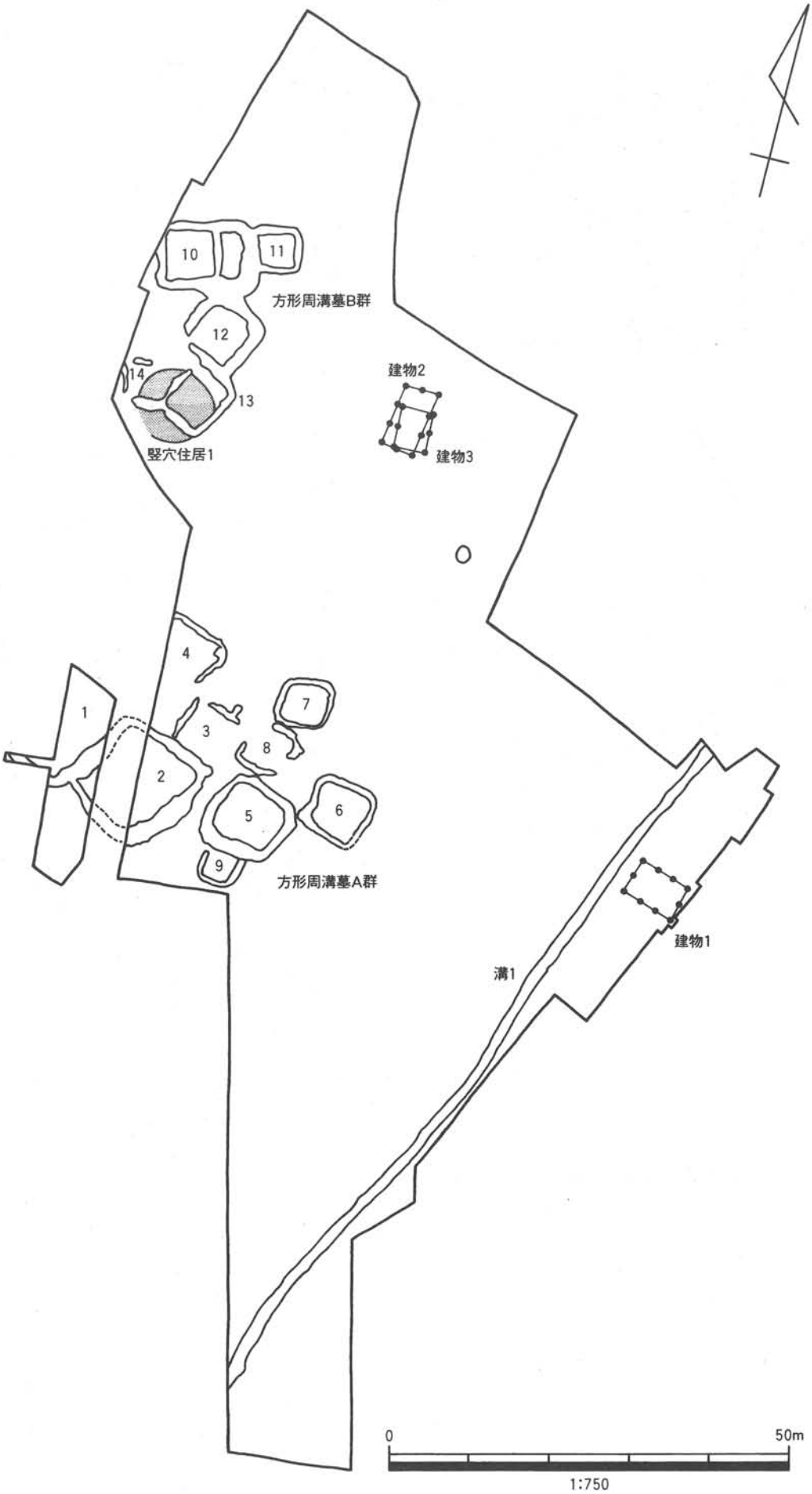

10
11
方形周溝墓B群
12
14
13
竪穴住居1
建物2
建物3
4
1
3
7
8
2
5
6
9
方形周溝墓A群
建物1
溝1
0
50m
1:750

図3　Ⅱ区全体図

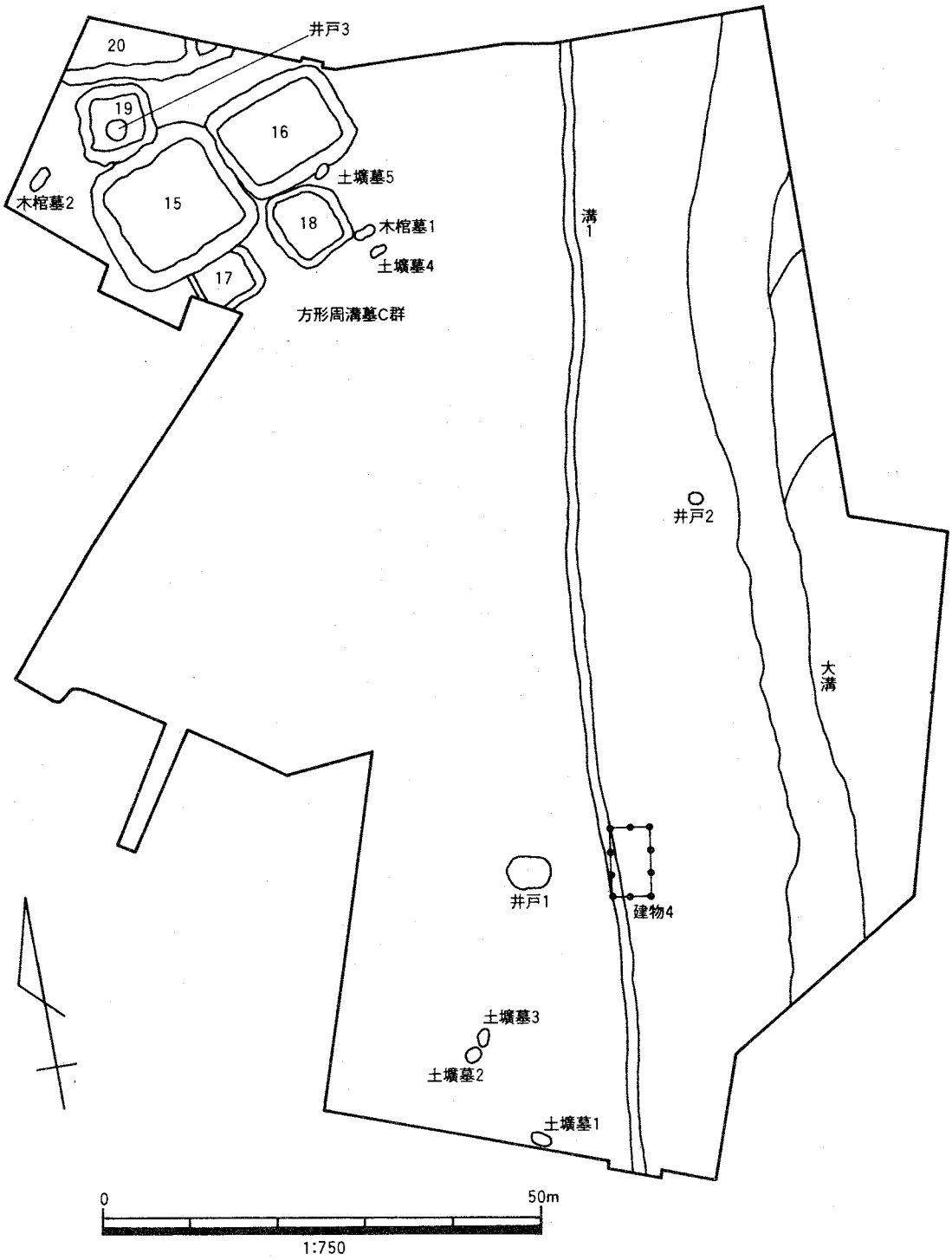


図4　Ⅲ区全体図

いた。埋土から付札が出土している。井戸３は直径2.3m・深さ1.7mの井戸で、縦板を方形に組んで一辺約１mの井戸枠とし、埋土から「徳」と墨書された土師器Ⅲや刀子などが出土している。なお、建物としては未確認であるが周囲には方形の柱穴が幾つかみられる。

大　溝　　Ⅲ区の東側で幅６～９mの大溝が検出された。自然流路と考えられるが、埋土から弥生時代の石器や土器なども出土している。また、上層からは奈良時代の土師器甕が出土し、奈良時代

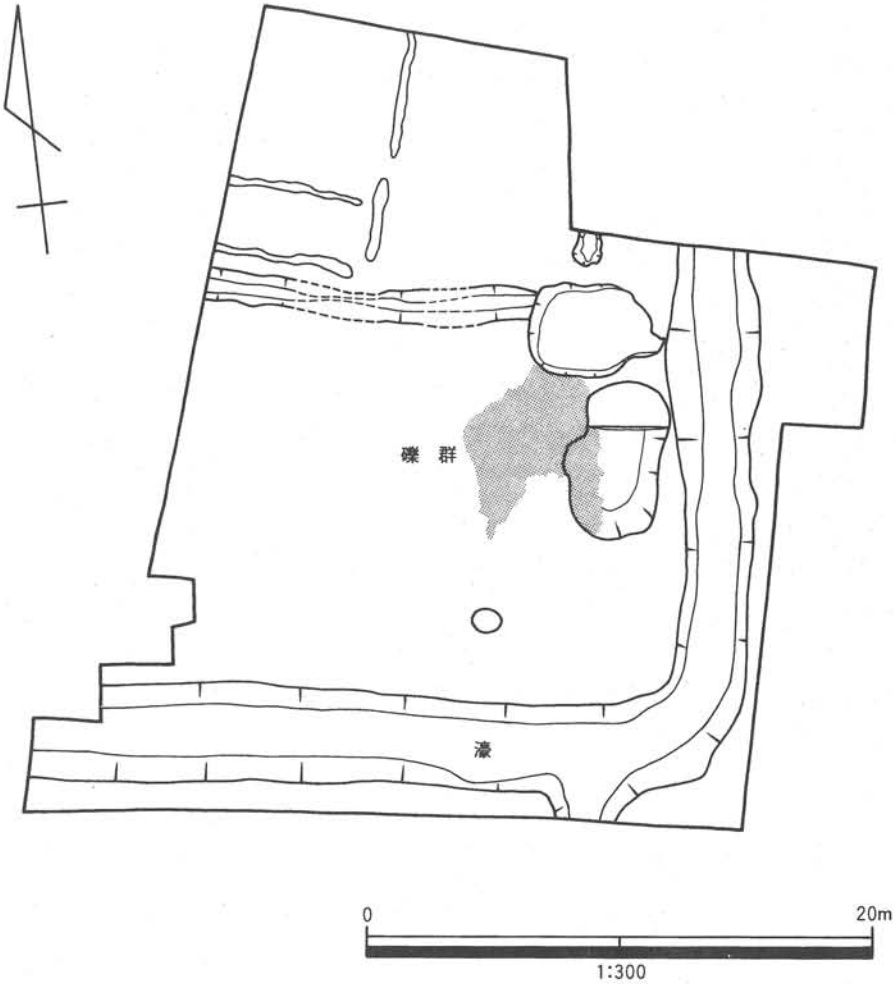


図5　Ⅰ区屋敷跡

に埋没したらしい。

(4) 室町時代

Ⅰ区の西北部、ＪＲ東海道線付近で室町時代の屋敷跡を検出した。

屋敷跡　幅３～４ｍ・深さ0.5～0.7mの濠で囲まれた屋敷跡の南東隅が検出された。濠は東西25m・南北20mにわたって確認でき、屋敷地は北西方向に広がっている。内部から土坑や礫群が検出され、庭園が造られていたようである。さらに、南側の濠から南側へ続く濠が確認されており、屋敷地が南北に連なり集落を形成していたと考えられる。

屋敷跡南部で多量の土器・陶磁器などが投棄された状態で出土した。土器などの特徴から15世紀後半が中心とみられ、土師器皿・杯をはじめ瓦質の火鉢・鍋がある。瓦質火鉢は室町時代の商品として知られる奈良火鉢で、竜泉窯系青磁盤・白磁椀や瀬戸窯の皿、信楽焼・常滑焼の壷などもあり多彩な器種構成を示している。

まとめ

発掘調査では、縄文時代から室町時代の遺構・遺物が検出され、神内付近が古くから栄えた地であることが判明した。各時代の特徴的な点をまとめてみる。

縄文時代　縄文時代後期の土器・石器が出土したが、大阪北部の縄文時代遺跡を検討すると、いずれも丘陵の麓や扇状地に立地し、幾つかの遺跡が周辺にある。神内遺跡の近くにも、1km程離れた島本町桜井の丘陵の麓に越谷遺跡がある。ドングリのような堅菓類を採集するのに適し、この地域を生活圏として移動していたのかも知れない。

弥生時代　3群20基の方形周溝墓が検出された。このような多数の方形周溝墓が検出された例としては高槻市では安満遺跡がある。最近では京都府大山崎町下植野南遺跡で100基近くが検出されている。検出された方形周溝墓には規模の大小や幾つかのグループがあり、このことを手がかりに集落内の家族構成などの研究を進めることができる。

方形周溝墓群や竪穴式住居は調査地の西側に拡がり、相当大規模な集落であったと想像できる。さらに、他地域から搬入された石器や石材からみて大阪北部の流通拠点としての役割も果していたのであろう。

奈良時代以降　山陽道に沿うように屋敷地が形成される。現在の神内の集落は、すでに室町時代には形成されていたようである。室町時代の屋敷地は大きな濠に囲まれ、接しながら集落が営まれ、防衛的な面と惣村と言われる集落内の結びつきの強さを示している。

なお、遺物の多くは整理途中である。文中で触れた以外に軟質の韓式土器、銭貨なども出土している。銭貨には天聖元寶など北宋銭と萬年通寶、江戸時代の文久永寶（1863年）などもある。

Ⅱ　文化財保護啓発事業

1．ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会

日　　程　　平成12年５月27日(土)・28日(日)　10時～16時

内　　容　　史跡新池ハニワ工場公園において、多くの方々が文化財に接し理解を深めてもらえるように、親子で参加できる体験型のイベントを実施している。

第６回目にあたる今回、ハニワづくりの部ではハニワをモデルにしつつも、自由な発想の大振りな作品が数多くみられた。スケッチの部では、ハニワや工場公園の様子をいきいきと描写した作品が目をひいた。ぬり絵の部では、下絵を２種用意し、フキダシにせりふを書き入れ、題名をつけてもらうようにした。大人の発想にはない彩色やせりふも数多く、子供たちの着想の豊かさには驚かされた。応募作品は厳正な審査を行い、各部門ごとに入賞作品を選んだ。全作品の展示と賞・記念品贈呈をジャスコシティ高槻で行い、入賞作品は小さな展覧会会場でも展示した。

協　　賛　　ジャスコシティ高槻

参 加 者　　742人

展　　示　　ジャスコシティ高槻　７月26日～30日　10時～20時（表彰式30日、15時まで）
小さな展覧会会場（高槻市生涯学習センター展示ホール）　9月28日～10月3日

2．小さな展覧会

日　　程　　平成12年９月28日～10月３日　９時～17時

会　　場　　高槻市生涯学習センター展示ホール

内　　容　　「城・まち・くらし」をテーマに、中世の芥川山城及び近世高槻城の出土品を中心に、城下町・高槻のありさまや当時の暮らしぶりがうかがえる資料を精選して展示した。

速報コーナーでは、古曽部窯跡と安満山Ｂ１号墳の出土品を展示した。

共　　催　　高槻市文化振興事業団

参 加 者　　3,233人

講 演 会　　「高槻城下のキリシタン」（平成12年10月１日）

講　　師　　三俣　俊二氏（聖母女学院短期大学元教授）

参 加 者　　67人

3．高槻歴史紀行ウォーク

日　　程　　平成12年11月５日　10時～15時

内　　容　　史跡等の文化財に親しむ機会を提供するとともに、本市のアイデンティティを市内外に発信、啓発するため、「高槻歴史紀行」と銘打ってスタンプラリーの要素を加味した歴史ウォークを開催している。

第２回にあたる平成12年度は、史跡今城塚古墳と平成７年３月に整備した史跡新池埴輪製作遺跡を軸にルート２「大王墓とハニワの里」を設定した。ルート前半は戦後の高槻の都市化を促した国道171号線沿いの大工場群、後半は史跡今城塚古墳から太

田茶臼山古墳(茨木市・現継体天皇陵)、そして両古墳に埴輪を供給した新池遺跡に至る陵墓造営の現場をたどり、古代から現在に思いを馳せてもらおうというものである。

コース　スタート：ＪＲ摂津富田駅→（女瀬川堤防）→史跡今城塚古墳（遺跡解説・スタンプポイント、ミニ講演会、昼食）→太田茶臼山古墳（遺跡解説）→二子山古墳→土室川分水路緑道→ゴール：史跡新池ハニワ工場公園（遺跡解説・スタンプポイント）

講演会　「今城塚古墳は何を物語るか」（今城塚古墳現地講演会）

講　師　高橋　克壽氏（奈良国立文化財研究所主任研究官）

参加者　151人

4．発掘調査現地説明会

市内遺跡の調査成果を市民に公開し、その普及啓発を図るため、現地説明会を開催している。平成12年度は３回実施した。

遺　跡　名	実　施　日	参加人数
高槻城三ノ丸跡	平成12年７月２日(日)	315人
神内遺跡	平成12年８月26日(土)	379人
史跡今城塚古墳 第4次確認調査	平成12年11月26日(土)	831人

高槻城三ノ丸跡の調査は、東郭北西部において実施した。高山右近期と推定される中世高槻城の大堀や元和三年（1617）修築にかかる高槻城外堀・内堀などを検出し、高槻城キリシタン墓地の発見などで関心が高まっているなか、注目される調査となった。神内遺跡では、平成10年度から実施した調査が最終段階を迎えたなか、11年度調査区の方形周溝墓群をメインに遺跡全体を概観する説明会を実施した。

史跡今城塚古墳第４次確認調査は、前方部西側の墳丘～外濠部にトレンチを設定し、墳丘全長を確定し内堤で埴輪列を検出したほか、墳丘変形に伏見地震（1596年）の影響が顕著であることなどの成果を得た。史跡今城塚古墳確認調査については、回を重ねるたびごとに参加者が増加しており、本史跡への市民的関心の高さがうかがわれる。

5．歴史民俗資料館

高槻市指定有形文化財・旧笹井家住宅を移築・復元し、高槻市立歴史民俗資料館として、その保存活用を図っている。当館では、民俗文化財等に関する資料を収集・保存しており、それらの展示や、講座を開催した。

企画展示　「くらしのなかのきかい」　平成12年２月１日～５月28日

「大工道具～清福寺大工組～」　平成12年６月６日～10月８日

「旅と交通」　平成11年10月17日～13年１月28日

「米づくりの道具」　平成13年２月６日～５月28日

講　座　夏休み親子で楽しむ「紙パック昔のおもちゃ作り」　平成12年７月29日

講師：増井　正治氏、松井　忠夫氏（伝承玩具研究家）　参加親子25組

「ゆとりと憩いの文化」　　平成12年10月25日
講師：木畑　紳一氏（園芸研究家）　参加10人
「いのちのかがやき～かこ・げんざい・みらい～」　　平成13年３月21日
講師：泉　良明氏（高槻市人権啓発指導員）　　参加21人

寄贈民俗文化財　　29件

6．文化財現地公開展

日　　時　　平成12年９月30日～10月１日　10時～16時

内　　容　　文化財に接しその理解と認識を深める機会として、所有者等の協力を得てその所在地で公開、解説等を行う。平成12年度は、高槻市安満磐手の町所在・磐手杜神社及び氏子中の協力を得て、同社所蔵の古文書類、安満馬祭りにかかる祭具・鞍類並びに神輿の組み立て作業を公開した。

また文化財保護審議委員・原泰根氏の協力を得て、同社の基本調査を実施した。

参 加 者　　347人

7．淀川三十石船舟唄全国大会

高槻市指定無形民俗文化財である「淀川三十石船船唄」の継承、普及・発展を図るため、第８回全国大会を開催した。

日　　程　　平成12年11月23日（祝）　10時～17時

会　　場　　高槻現代劇場中ホール

出 場 者　　232人（うちジュニア25人）

入 場 者　　600人

主　　催　　第８回全国大会実行委員会、高槻市、高槻市教育委員会

8．平成12年度施設利用状況

施　設　名	見学者数	利　　用　　日	所　在　地
歴史民俗資料館	15,533人	1/4～12/28（月・祝翌日・年末年始休み）	城内町3-10
埋蔵文化財調査センター	2,749人	1/4～12/28（土・日・祝・年末年始休み）	南平台五丁目21-1
史跡新池ハニワ工場公園	16,562人	年　間（工場館12/29～1/3休み）	上土室一丁目
安満宮山古墳	12,082人	1/4～12/28（公園墓地開園日）	安満御所の町

9．資料等の刊行

高槻市文化財調査報告書第22冊『高槻城キリシタン墓地』－高槻城三ノ丸跡北郭地区発掘調査報告書－、速報『史跡今城塚古墳』－平成11年度第３次確認調査－、及び『高槻市史史料目録』第23号を刊行した。

10. 文化財資料の貸出

文化財の普及啓発を図るため、所蔵資料・写真記録類の貸出・掲載許可を行った。

埋蔵文化財調査センター所管　　50件210点（写真記録類141点、遺物69点）

文化財係所管　　5件181点（写真記録類179点、古文書2点）

11. 報告書等の受け入れ

図書交換先関係機関等から調査報告書等1,654冊を受納した。

12. 出土遺物保存処理

市内出土資料の恒久的保存を図るため、木製品・金属製品等の経年変化が著しい遺物について、保存処理を順次委託実施している。これまでに郡家車塚古墳出土の漆塗槍柄や高槻城キリシタン墓地出土の二支十字墨書木棺などを完了、平成12年度は次に掲げる3件を実施した。

① 津之江南遺跡出土の柱根（3か年計画の2年目、PEG法）
1998年、律令期の大形建物から出土。一辺1mの方形掘形内に据えられ、直径40cmを越える市域最大級の規模を有する。2点。

② 史跡今城塚古墳出土の木製品（高級アルコール法）
史跡今城塚古墳の第3次確認調査出土品。後円部南側内濠の濠底から出土した古墳築造に関　わる杭のほか、板材・楔状木製品など7点。

③ 塚脇F1号墳出土の金属製品（アクリル系樹脂強化）
横穴式石室内から1992年に出土。金銅装の鞍金具、鉄斧など10点。

13. 文化財等の維持補修等

史跡新池ハニワ工場公園

野外展示場の躯体塗装・舗装一部補修、植栽表示窯の補植等を実施した。

青龍三年の丘　安満宮山古墳

古墳見学用の木製階段をスロープに改修した。また公園墓地入口に文化財説明板「安満宮山古墳」を新設した。

高槻市指定有形文化財　旧笹井家住宅（高槻市立歴史民俗資料館）

屋根・外壁（腰壁張替）・樋等の修理を実施した。

歴史の散歩路（市内8コース）

「笠松地蔵」駒札など、説明板・標柱の建替7件、塗替19件を実施した。

14. 歴史体験事業

埋蔵文化財調査センター内の復元住居建て替えにあたり、地域の歴史文化にふれる体験学習の機会として、市内小学6年生が参加。淀川・鵜殿のヨシの刈り取りや屋根葺き、古代食の再現などに取り組んだ。体験参加は4回、参加者はのべ120名。（本書「歴史体験事業報告」を参照）

Ⅲ　指定文化財

1．文化財の指定･追加指定

(1) 重要文化財（考古資料）の指定

青龍三年銘方格規矩鏡などの安満宮山古墳出土品が、一括して重要文化財の指定を受けた。同出土品は平成９年７月～10月の発掘調査で出土し、「古墳時代の開始に大きな役割を果たした大和から木津川･淀川流域の重要性をさらに裏付けるもの」として平成10年３月10日付けで国保有（文化庁保管）となり、現在高槻市教育委員会にて借用保管している。

平成12年６月27日付　文部省告示第120号

名称及び員数　　大阪府安満宮山古墳出土品　　所有者　　国（文化庁保管）

一、銅　鏡　　５面　１面に青龍三年の銘がある

一、鉄製品　　９点

一、ガラス小玉　　一括

附　苧麻布片　　２点

指定理由(抜粋)　　安満宮山古墳から一括で出土した銅鏡５面は、「青龍三年」銘をもつ方格規矩鏡、同向式という定型化以前の平縁神獣鏡および定型の対置式四神四獣鏡という三角縁神獣鏡では古い型式の文様構成をもつ鏡が共伴する、幅広い構成をもつ点が特徴である。同時に武器･工具等の鉄製品及びガラス小玉類など、古墳発生期の様相を明瞭に残している点で、きわめて学術的価値が高い。

名　　称	数量	法　量　等（cm）	備　　考
三角縁吾作銘環状乳四神四獣鏡	1面	直径21.8	1号鏡
青龍三年銘方格規矩四神鏡	1面	直径17.4	2号鏡
獣文帯四神四獣鏡(天･王･日･月･吉銘)	1面	直径22.5	3号鏡
斜縁吾作銘二神二獣鏡	1面	直径15.8	4号鏡
平縁陳是作銘同向式神獣鏡	1面	直径17.6	5号鏡
鉄　大　刀	1口	全長68.0 幅2.5	
有袋鉄斧	1箇	全長11.4 刃幅4.2	
鉄　刀　子	2本	①全長9.6　②現存長10.4	
鉄ヤリガンナ	2本	①全長23.1　②全長26.9	
鉄　ノ　ミ	1箇	全長20.5　幅1.0	
鉄　　鎌	1箇	全長14.1 幅3.9	
ガラス小玉	一括	直径･厚み0.3～0.45	1,603箇
苧麻布片	2片		1号鏡を包んでいた

(2) 名勝の追加指定

富田町四丁目に所在する普門寺は、昭和52年に方丈が重要文化財に、また昭和56年には庭園が江戸時代初期作庭と推定される優秀な枯山水庭園として名勝に指定された。このときの指定範囲は庭園自体とその北・西側の背景をなす土塁に画された地域であるが、このほど方丈等を含む地域が追加され、墓地をのぞく境内の全域が名勝の指定を受けた。

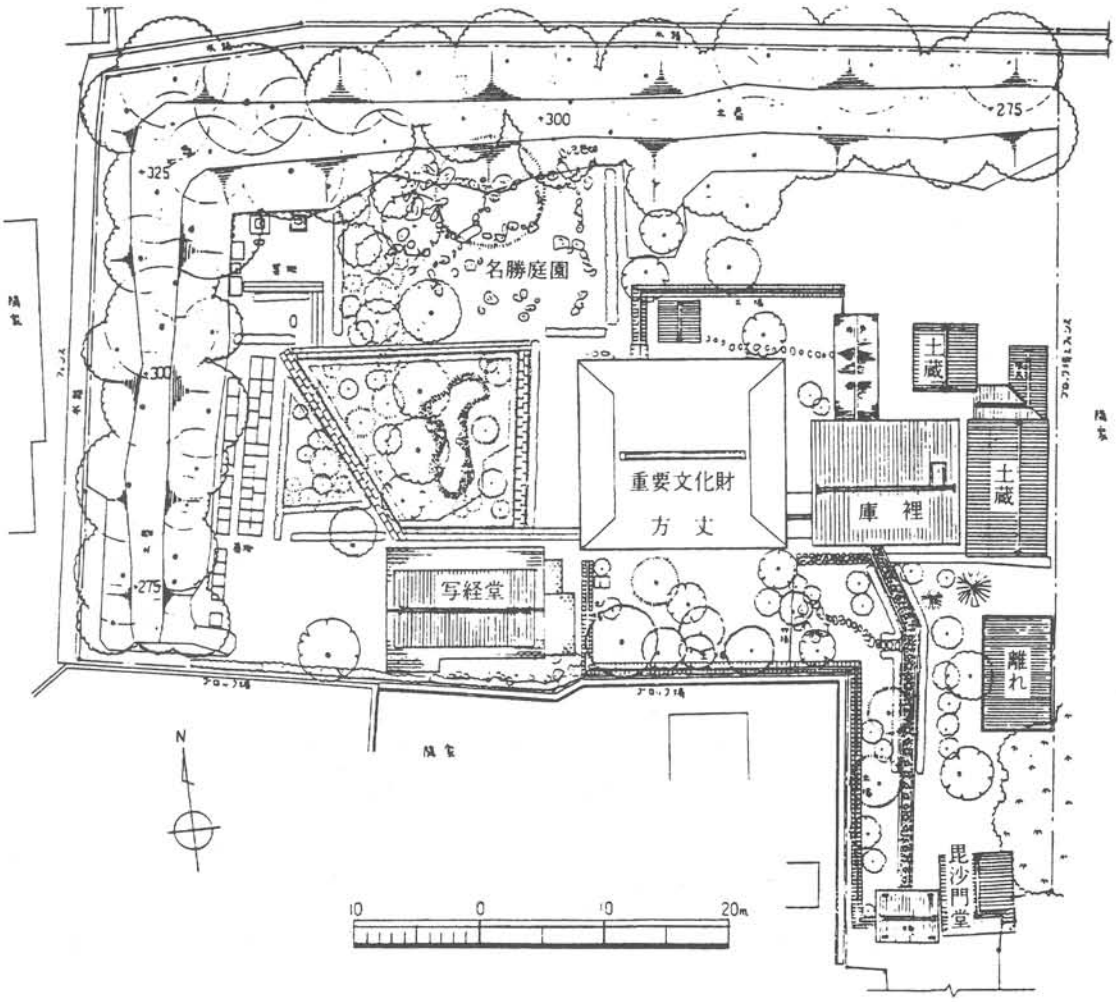
平成12年12月13日付　文部省告示第190号

名　　称　　普門寺庭園

所 在 地　　大阪府高槻市富田町四丁目

地　　域　　2960番の１、3070番の１（地域追加後）

指定理由（抜粋）　追加指定をしようとする範囲は、庭園に面し、庭園鑑賞の場である方丈ほか江戸時代寺院隆盛時の状況を伝える山門、毘沙門堂、隠元禅師作と伝える黄檗式石畳、寺院境内を画す中世普門寺城の遺構とみられる土塁等を含め、庭園を取りまき風致景観の上で一体となっている区域である。この追加指定により、貴重な庭園を良好な環境のもとで保存しようとするものである。



Ⅳ 報 告

今城塚古墳前方部における地滑りの痕跡

寒 川　　旭
（産業技術総合研究所活断層研究センター）

平成12年度に高槻市教育委員会が行った史跡今城塚古墳の第４次確認調査（前方部墳丘～外濠）で、墳丘の一部が大きく滑り落ちた痕跡が認められたので概要を報告する。

１．地滑りの痕跡

今回の調査は、前方部墳頂から北西方向に向かって円弧状に発達した滑落崖（地滑りによって生じた崖）の位置から、地滑り地塊が内濠を横断するまでの約60mの区間にトレンチを設定して実施された（図１・２）。

まず、滑落崖の位置では、墳丘の盛土層の北西側が低下するように滑り落ち、ほぼ垂直な滑り面に沿って幅約60cmの開口割れ目が生じていた。

滑り落ちた盛土層の最下部（墳丘の地表面から約６cmの深さ）では、地山の粘土～シルト層（沖積層）との境界付近に水平方向の滑り面（写真１）が認められ、この面に沿いながら、地塊が北西方向に向かって水平に滑り動いたことがわかった。この盛土層は、本来水平だったものが最大55度で南東に（滑落崖に向かって）傾斜していたが、墳丘から切り離されて移動したことによって大きな隙間が生じ、この隙間に向かって、移動した側の盛土層が倒れかかるように傾いたものと思える。

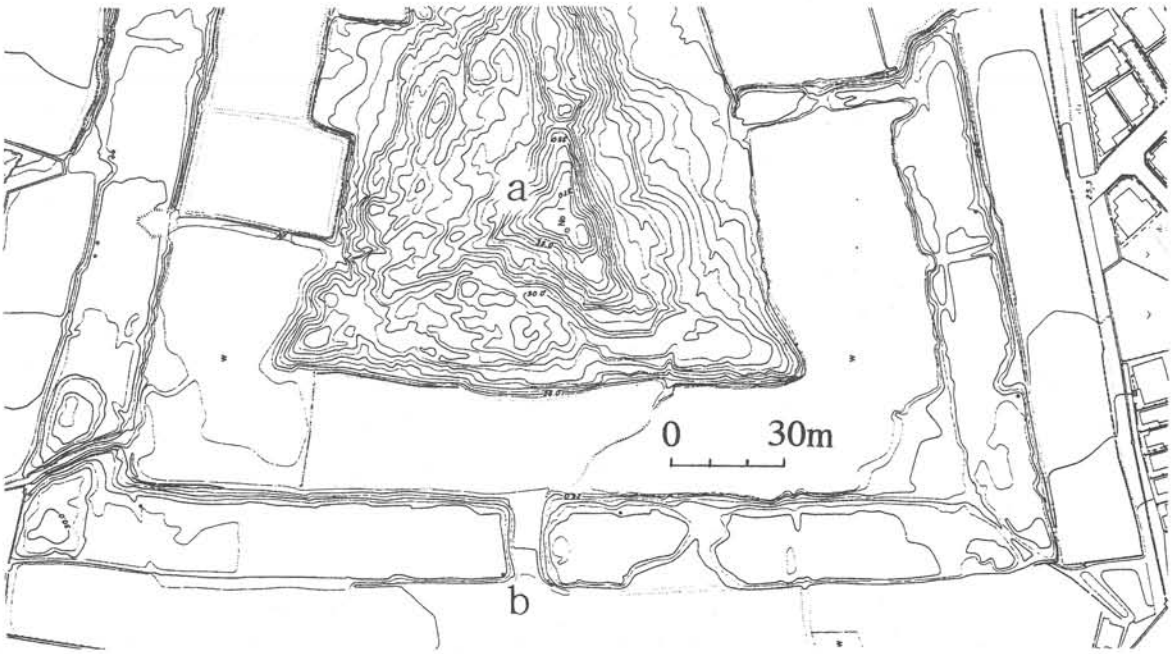


図１　今城塚古墳の地滑り地形
a･b間を細長く掘削した。

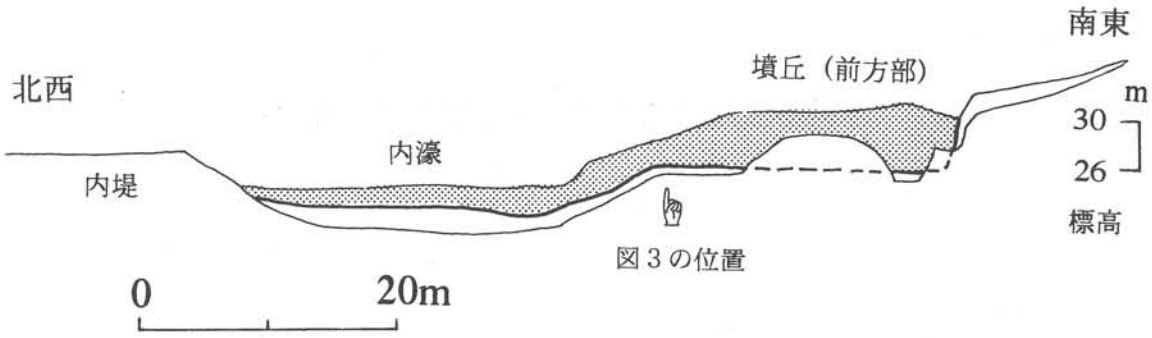


図２　トレンチの断面模式図
網の部分が地滑りの地塊。
細実践は発掘範囲、太実践は滑り面（波線は推定）。

図３　地滑りによる墳丘の変形（図２の矢印の位置）
盛土と地山の境界付近に生じた滑り面に沿って、盛土が図の左方向に滑り動いた。この過程で、盛土は引き延ばされながら細かく切断された。地山の表面を覆う黒色土壌の一部も盛土と一緒に滑り動いた。

滑落崖から８ｍほど離れると、滑り落ちた側の盛土層もおおむね水平になり、ここから10数ｍの範囲では深さ５～６ｍの位置にある滑り面に沿って水平に移動していた（図３・写真２）。滑り面は盛土層と地山の境界に生じているが、一部では地山の最上部にあたる黒色土壌の下側に滑り面が形成され、黒色土壌が10cm前後の厚さで剥がされて盛土と一緒に滑り動いていた。

墳丘末端の斜面付近にさしかかると、滑り面が斜面に平行になるように傾き、盛土層も多くの正断層によって切断されながら引き延ばされていた。

当時、内濠には厚さ２ｍあまりの地層（下部が粘土、上部がシルト・砂の互層）が堆積しており、これに向かって、盛土層からなる地塊が滑り落ちていた。濠に落下した地塊は、砂層の表面を長さ26ｍにわたって滑り、対岸の内堤に到達した段階で停止している。濠に入ったさい、地塊は水を含んで液体の性格を備えるようになり、本来は水平に何層も積み重なっていた盛土が、回転したり引き延ばされることによって複雑な模様を示していた。

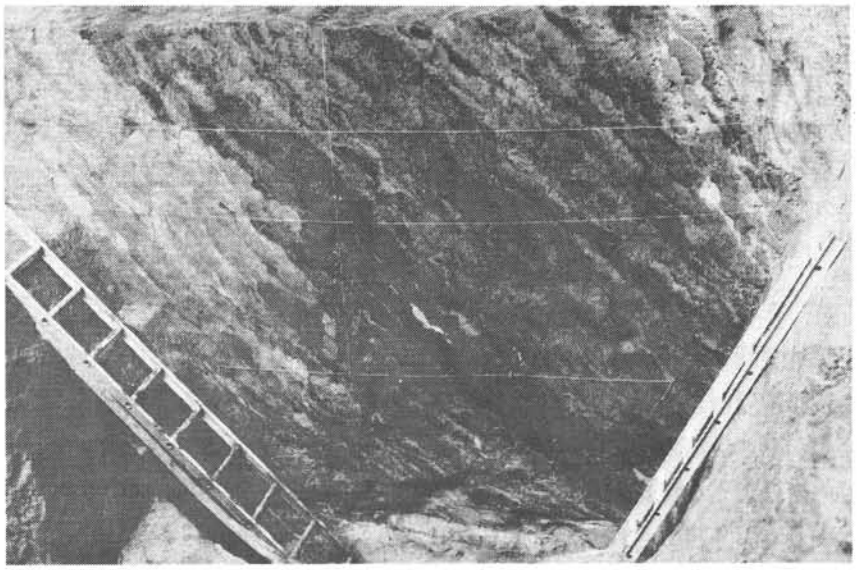


写真1
滑り落ちた墳丘の傾斜
最大55度の傾斜を示し、写真の最下部にみられる白っぽい粘土（地山）との境界で左方向へ滑り動いている。

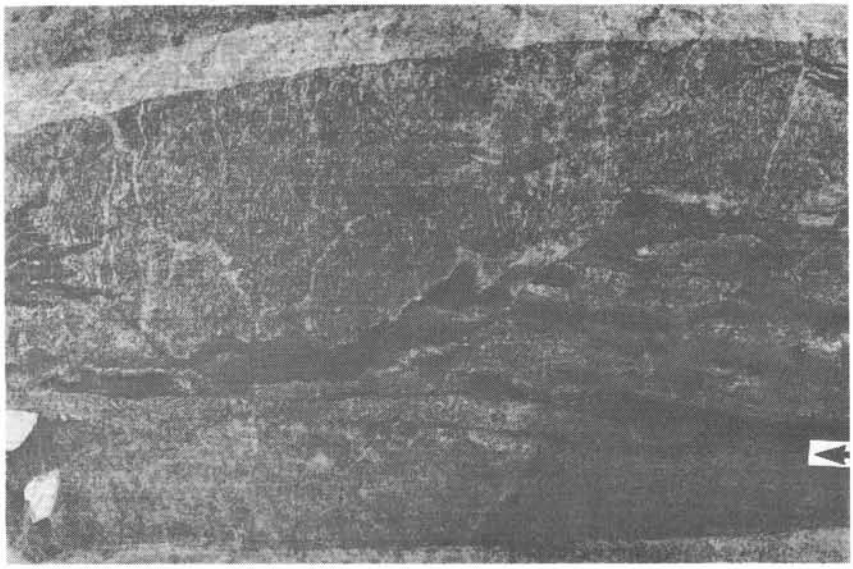


写真2
滑り動いた墳丘の盛土
図3に対応するもので、矢印を境にして上側が左に滑り動いている。

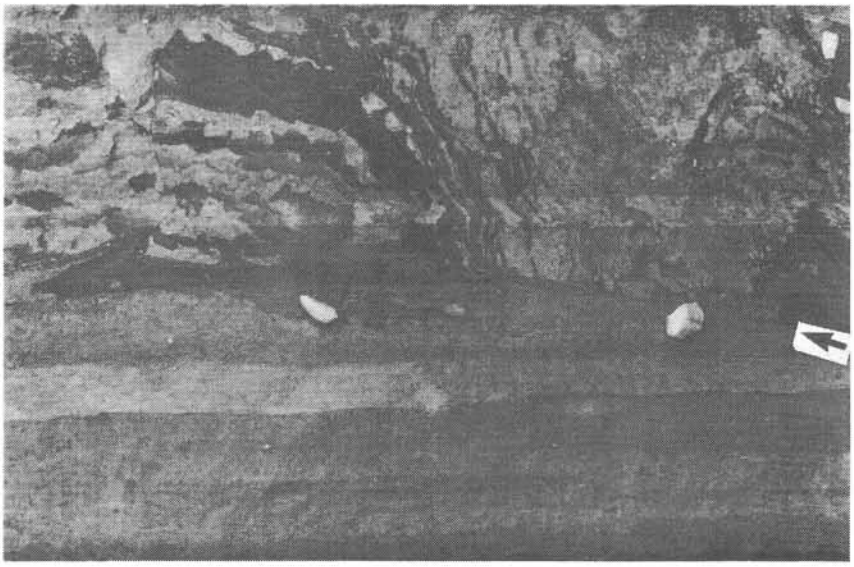


写真3
内濠における墳丘盛土の変形
矢印を境にして、上側が左方向に滑り動いている。滑り動いた墳丘盛土は著しい変形を示している。

2．地滑りの年代と成因

濠に堆積した地層の最上部（滑り面より数cm下方）で、ヒシの果実が採取され、これから得られた放射性炭素年代測定値は430±40yB.P.（Beta－150660：補正値）となった。暦年代もおおむね西暦1430～1470年代と算定され、地滑りが15世紀後半以降に生じたことがわかった。

一方、1596年９月５日に京阪神・淡路地域を襲った伏見地震（M：マグニチュード８近い超大型地震）で、大阪平野北縁に位置する有馬―高槻構造線活断層系が活動したことが判明している（工業技術院地質調査所、1996など）。このため、この活断層系を構成する安威断層の東方延長線上に築かれた今城塚古墳は、とくに激しい地震動をこうむったはずである。さらに、ボーリング資料により、この古墳が、厚さ数mの軟弱な沖積層のうえに築造されたことがわかっている。

このような背景から、今城塚古墳前方部における大規模な地滑りが、伏見地震に伴う激しい地震動によって引き起こされたと考えられる。

参考文献

工業技術院地質調査所（1996）　『平成７年度活断層研究調査概要報告書』 98p.

寒川　旭・宮崎康雄（2001）　「今城塚古墳で認められた地滑りの痕跡」『日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集』24―25

歴史体験事業報告「弥生時代の竪穴住居を復元しよう！」

鐘ケ江　一　朗

子供たちが地域の歴史文化にふれる体験学習の機会を設け、文化財の普及啓発に資するため、埋蔵文化財調査センター内で復元・公開している弥生時代の復元住居の建て替えを、「歴史体験事業」として小学校６年生と職員・地元作業員との共同作業で実施した。

この復元住居は、古曽部・芝谷遺跡のＳ12号住居をモデルとしている。火災にあい土器や鉄器などが原位置で出土するとともに、周壁沿いに板壁を設けていたことが確認された重要な調査例である（『古曽部・芝谷遺跡』高槻市教育委員会1996）。15年ぶり２回目の建て替えにあたり、地域の文化財を地域の材料を使って復元するという位置付けから、屋根葺き材として古来名高い淀川・鵜殿のヨシ(アシ)を使用することとした。そこで鵜殿周辺の小学校に体験参加を呼びかけ、上牧小・北大冠小から６年生・保護者・教諭など約30名の参加を得たものである。

体験参加は４回のべ110名、それぞれガイダンス及び作業員との共同作業体験を組み合わせて実施した。一連の作業はＣＡＴＶ㈱高槻ケーブルネットワークが取材・記録し、事業終了後に企画番組「ぼくらが建てた竪穴住居！」として放映された。児童たちがこの歴史体験事業への参加を機に、文化財や地域の歴史文化をまもる心を育んでくれればと願っている。またヨシ調達及び屋根葺き作業にあたっては、道鵜実行組合の多大な協力を得た。記して厚く感謝する。

１．竪穴住居の復元作業（図版第13）

モデルである芝谷Ｓ12号住居は、一辺約５ｍ、深さ約0.3ｍをはかる隅丸方形を呈し、主柱穴のほか床面中央に深い１穴をそなえている。従来この中央ピットを棟持ち柱の柱穴とみて上屋の復元を行っていたが、今回、同ピットは灰穴炉であるとの認識から棟木の支持方法を改め、垂木の一部に長材を用いて叉首を組み、棟木を受けることにした。

復元住居の規模は、外寸（軒先）で一辺約８ｍ、高さ約4.2ｍをはかる。主柱と桁・梁の結合は、主柱上端を桁材に合わせてえぐり、そこへそれぞれ端部を半欠きした桁・梁をのせてある。屋根は煙出しを両妻に設けた入母屋造りとし、ヨシで段葺きをほどこした。屋根勾配は約45度である。垂木下端は地面で受け、杭で固定した。棟は杉皮を葺き、半裁の竹でおさえている。煙出し開口部は割竹を垂木に固定して鳥除けとしている。入口は平側に設け高さ約1.6ｍ、屋根は両流れで棟は半裁の太竹でおさえた。側壁は柱間にヨシを立て、割竹で挟んで固定した。また筒竹を軸受けとして扉を取り付けた。

床面は隅丸方形で一辺約５ｍ、見学者の安全等を考慮して掘り下げは0.1ｍにとどめた。周囲には板壁をめぐらし、中央に木灰と川原石で炉を表現した（図１）。

作業にあたり、木組みや屋根葺材など使用資材は一新した。また部材の結合には強度を考慮して釘・番線等を使用して緊結のうえ、荒縄・棕櫚縄で隠してある。本来用材にはアラカシなど周辺に生育する樹種を選定し、主柱には又木、板には割板を使用すべきところであろうが、調達の便から皮付き杉丸太・杉挽き板を使用することとした。

今回調達、使用した資材は次のとおりである。

・皮付き杉丸太
L3.0m−φ16cm、8本<主柱、梁・桁>
L3.0m−φ6cm、2本<主屋根棟木・入口棟木>
L5.6m−φ8cm、5本<棟持ち垂木>
L4.0m−φ8cm、23本<垂木>
L2.0m−φ8cm、8本
<棟廻り・入口支柱>
L2.0m−φ4cm、34本
<主屋根横木・入口垂木>
・杉先付け杭
L1.5m−φ6cm、28本<垂木固定>
L1.5m−φ4cm、20本<板壁固定>
・杉板
L1.8m×w25cm×t1.2cm、80枚
<板壁>
・ヨシ 500束
(一束L2.5m−φ15〜20cm)
・丸竹 L4.0m−φ10cm、6本
・青竹 L4.0m−φ5cm、120本
・杉皮 L1.0m、5束分
・荒縄 10mm/50m巻き、20巻
・棕櫚縄 4mm、600m
・番線 #8、15kg
・銅線 #18、11kg
・その他 五寸釘、三寸釘

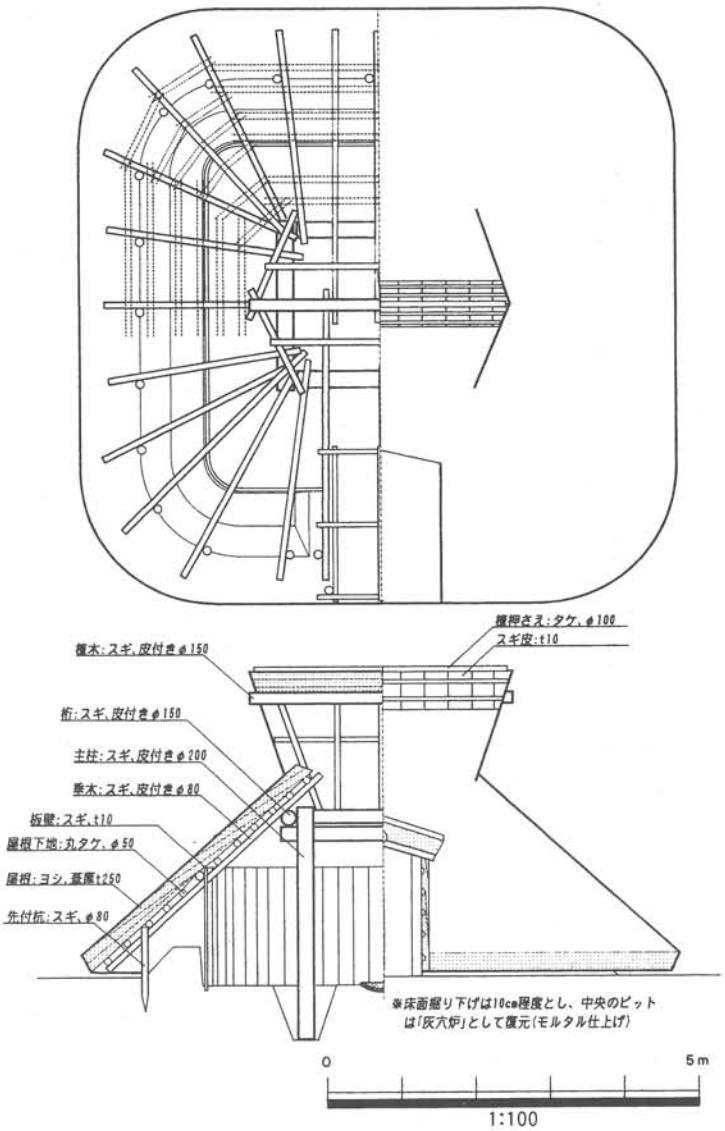


図1 弥生時代の復元住居 見取り図

作業工程は、既設住居の解体後、1.床面の掘削・土手成形、2.主柱建て込み、梁・桁取り付け、3.棟上げ、4.垂木取り付け、5.横木・横竹取り付け、6.屋根段葺き、7.板壁取り付けである。

資材は直接搬入し、丸太の切断や仕口にはチェーンソーや鋸、横竹の取り付けはドリルで穿孔後釘止め、ヨシを横竹と割竹で挟んで固定するには縄と銅線を併用するなど「文明の利器」を活用したが、アマチュア集団による復元作業は全体で約17日間、作業員のべ80人程度を要した。部材の規模や屋根の葺き方・厚み、作業者の熟練度など斟酌すべき事項は多いが、弥生時代において資材の調達や運搬、加工などの下準備に現在の数倍の手間と労力を要したことは想像に難くない。とりわけ葺材を刈り、切り揃える手間は現代の鉄鎌をもってしても並大抵でなかった。1棟の竪穴住居といえども、茅や板材の調達には幾秋冬を要し、建築には数日間、少なくとも数家族が共同作業を行ったものと推察される。

2．体験参加

第１日　２月10日(土) 9:00～12:00

場所：上牧小学校視聴覚教室、淀川河川敷

スライドとお話「弥生時代の高槻」「弥生時代の暮らし」

体験「鵜殿のヨシの話と刈取り見学・体験」

道鵜実行組合の協力を得て、ヨシを鎌で刈り直径20cm弱の束に束ねる作業を行った。長さ2.5～３mあり、根元は押し切りで切り揃えた。

第２日　２月17日(土) 14:00～16:00

お話「弥生時代の住居」

体験「復元住居の基礎と骨組みづくり」

ロープを掛けて柱穴に主柱を建て込み、桁と梁を渡してから主柱を固定した。ついで梁・桁材を緊結のうえ、桁材に棟持ち垂木を差し掛けて叉首を組み、棟上げを行った。

第３日　２月24日(土)9:30～12:00

体験「鵜殿のヨシによる屋根葺き作業」

桁･梁に四方から垂木を差し掛けて番線で緊結、根元を杭で固定して横木･横竹をまわし屋根下地を完成したところで、児童が参加して屋根葺き作業に着手した。歩み板を杭を固定し、下端を揃えて均等な厚みになるようにヨシ束を並べ、割竹と下地の横竹とで強く挟んでヨシを固定する。

ヨシは堅く表面が平滑でなかなか締まらず、銅線止めのうえ荒縄を用いたが難渋した。２段目以降は桁などからロープを垂らして歩み板を固定した。

第４日　３月４日(日)10:00～14:00

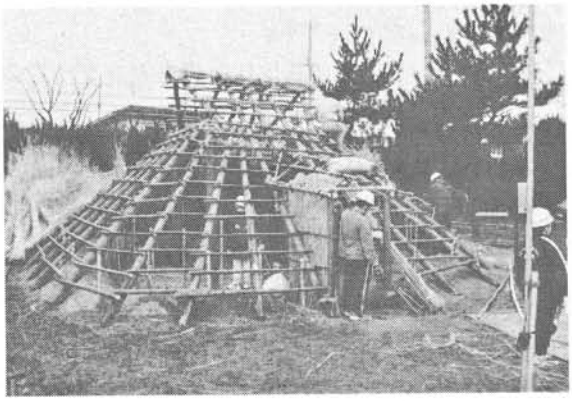
体験「板壁を取り付け住居完成、弥生時代の食事を再現」

当日までに棟廻りを除く屋根葺き作業をほぼ終えておき、現場合わせした杉板を上下２段、竹で挟んで固定して板壁をつくる作業を行った。これと並行して火起こし、復元土器による炊飯（玄米と白米)、炭火バーベキュー、貝汁などをつくり試食会を行った。

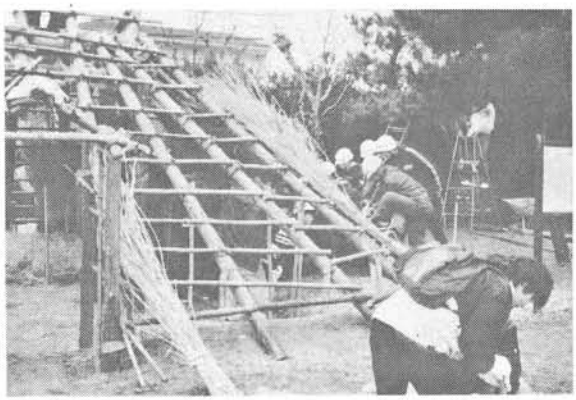
サヌカイト原石からの石器づくりや筒竹を割っ

第１日　ヨシを刈り取る

第２日　主柱を建てる



第３日　骨組みの完成



第３日　ヨシを屋根に葺く

て先付けする竹串づくり、それに各自が石器で切った肉を刺して焼くなど、児童には楽しく新鮮な経験であったようである。終了にさいし、板壁に各自感想を記して体験参加の記念とした。

3．参加者の感想

参加者からは初めての体験に驚きや喜びなど一様に好意的な反応が寄せられた。そのなかで寄せられた一文を掲載しておく。参加協力者は以下のとおりである。

飯尾　実、榎本康佐、大上恵子、大西祐宜、大仲秀治、大塚隆弘、木下勇作、篠原正俊、末廣義則、高木絹代、立石祐一、谷口正之、玉井聖幹、西田弘貴、溝口竜也、森　翔平、吉川直人、米澤征司（以上北大冠小学校）、池田理沙、池田一郎、池田智寛、井上公美子、梅本敬英、大田響介、大田英量、大塚菜緒、木村輝子、清川博貴、小山敦子、関　義郎、高槻直子、田和敬子、寺田祐子、中島理恵、西　英明、三好　遥、八尾千枝、山口泰弘、山下美抄子（以上上牧小学校）、アーキコロム・アコシュ（ハンガリー・短期留学生）

『ぼくらの作った　たて穴住居！』

篠　原　正　俊（北大冠小学校６年）

ぼくは、２月10日から歴史体験プログラムに参加しました。参加した理由は「多分いろいろ昔の事が分かるだろう。」と思ったからです。

そして‥‥１日目、上牧小での説明会が１時間。その後はヨシ刈り。ヨシ刈りでは、カマを使い何本ものヨシを刈っていく作業を、何回もしました。とてもつかれたけれど、ヨシをうまく刈れたときは、とてもうれしかったです。

２日目、いよいよ埋蔵文化財調査センターでの作業。木の柱をたてたりしてとても楽しかったです。この日には、ほとんど土台ができあがりました。

３日目、ヨシをふく作業。かけ声をかけながら、ヨシを屋根に固定していきました。この日は、とても作業がすすみました。ヨシをそろえるために切っていく作業がとてもおもしろかったです。屋根の上からのながめはなんとなくよかった。

４日目、いよいよ最終日。「サヌカイト」という石を使って、石のナイフを作りました。そのナイフで肉を切りました。火もおこしたりして最終日がやっぱり一番おもしろかったです。バーベキューもあったし、はじめての体験ばかり。いろいろな事も学べてよかったし、とにかく楽しかったです。

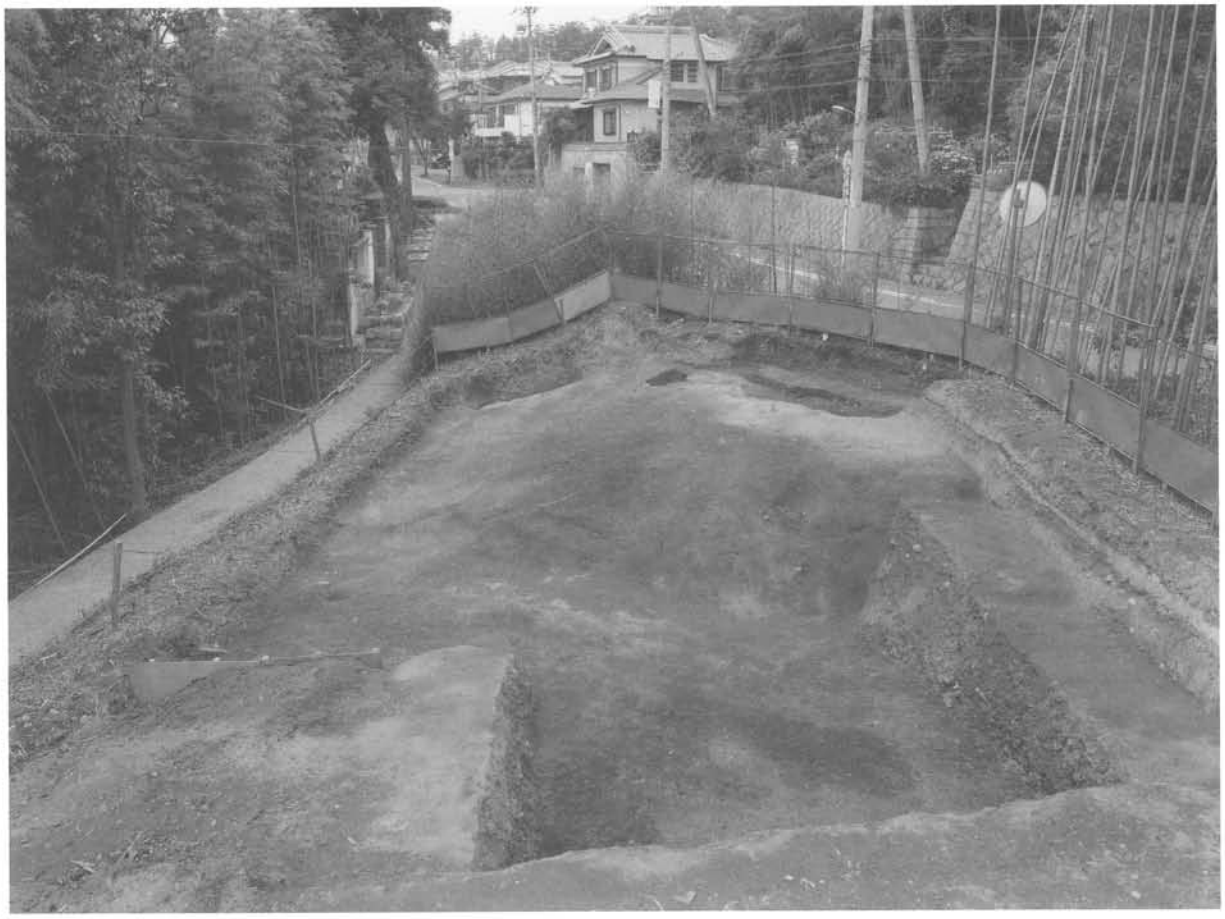
第４日　石器や土器を使った調理体験

図　　版

高槻城三ノ丸跡　護岸木組み（南側から）

a.高槻城三ノ丸跡　全景（北側から）

b.高槻城三ノ丸跡　中世「大堀」埋め立て状況



a.古曽部焼窯跡　調査区全景（東側から）

b.古曽部焼窯跡　灰層断面（南側から）

a.古曽部焼窯跡　茶器･日常什器類など

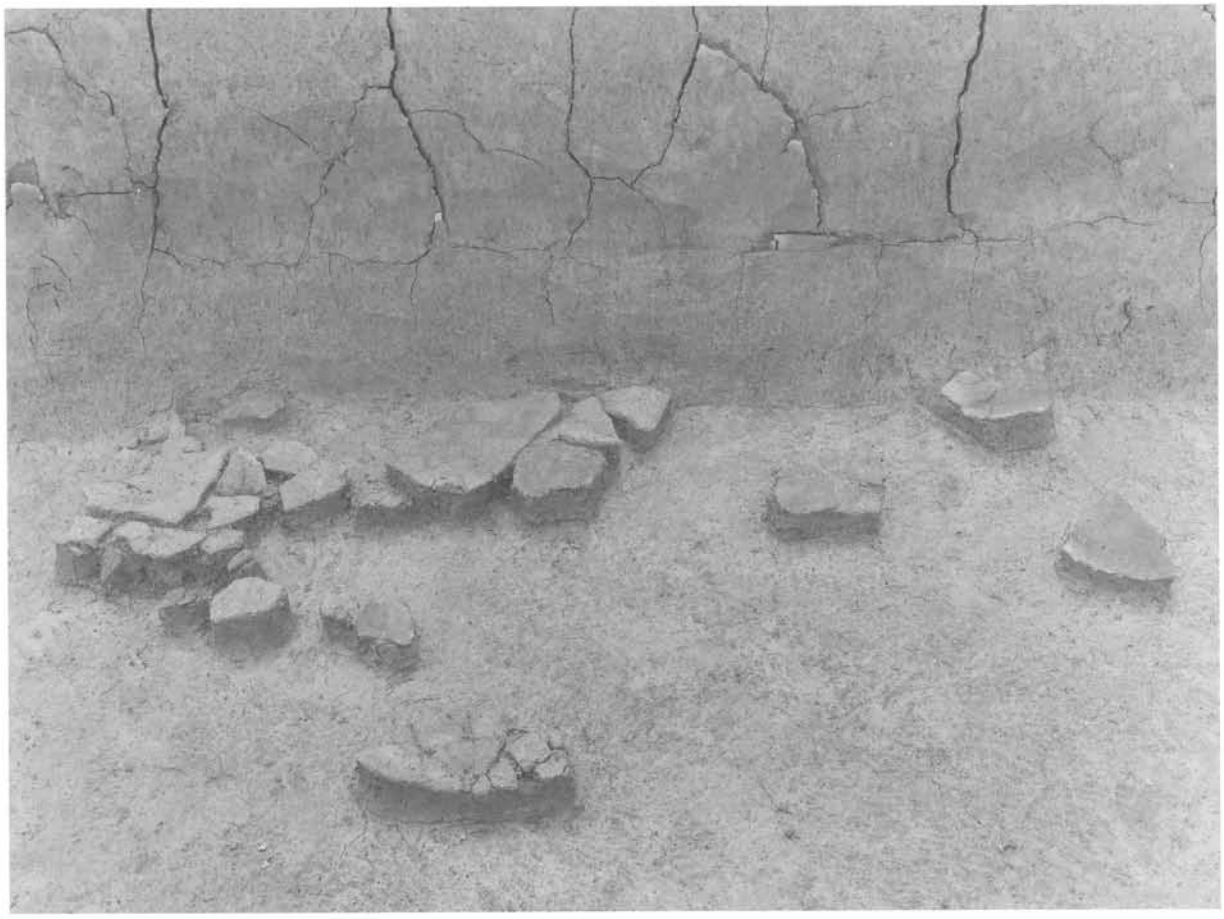
b.古曽部焼窯跡　窯道具類

a.古曽部焼窯跡　遊戯具・瓦類など

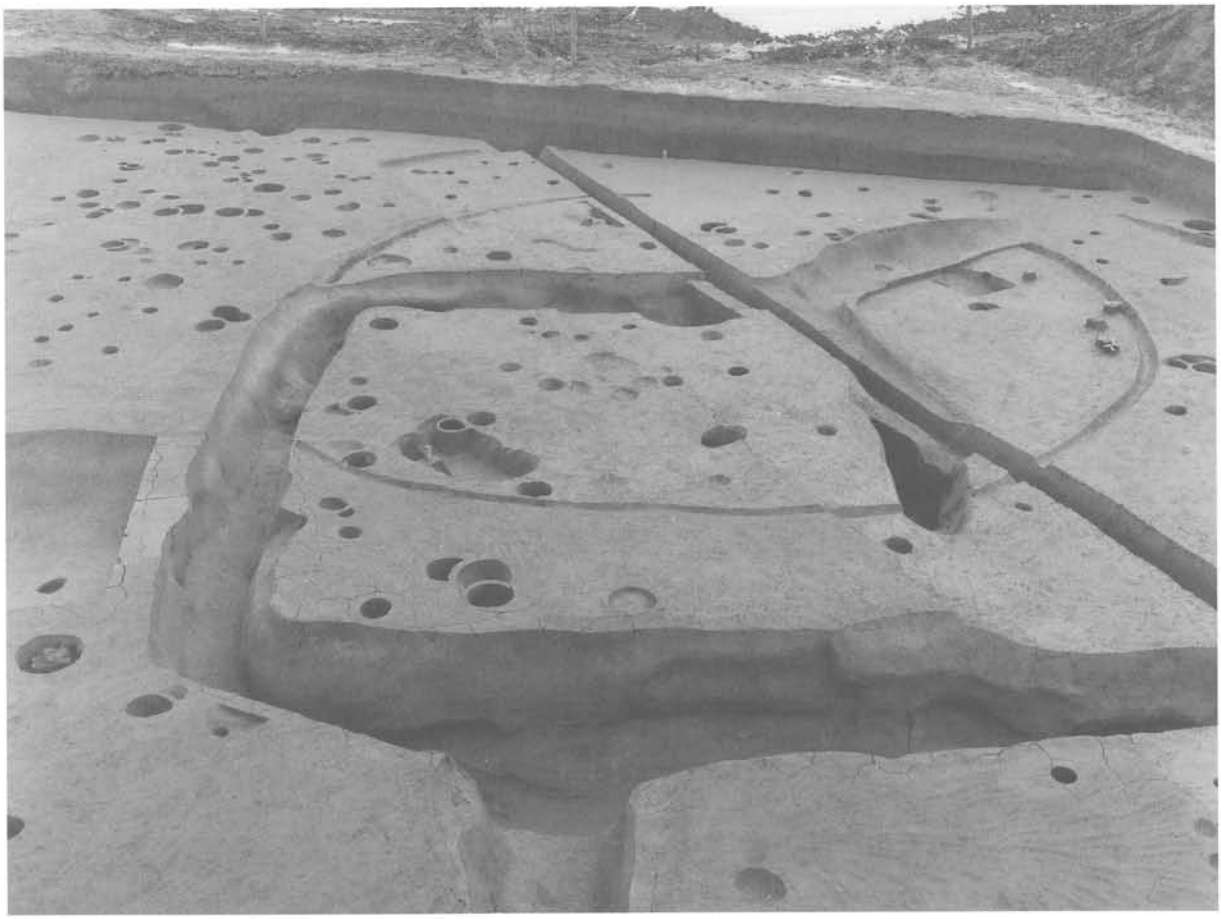
b.古曽部焼窯跡　把手・型など

a.安満山古墳群萩之庄C1号墳　全景（北側から）

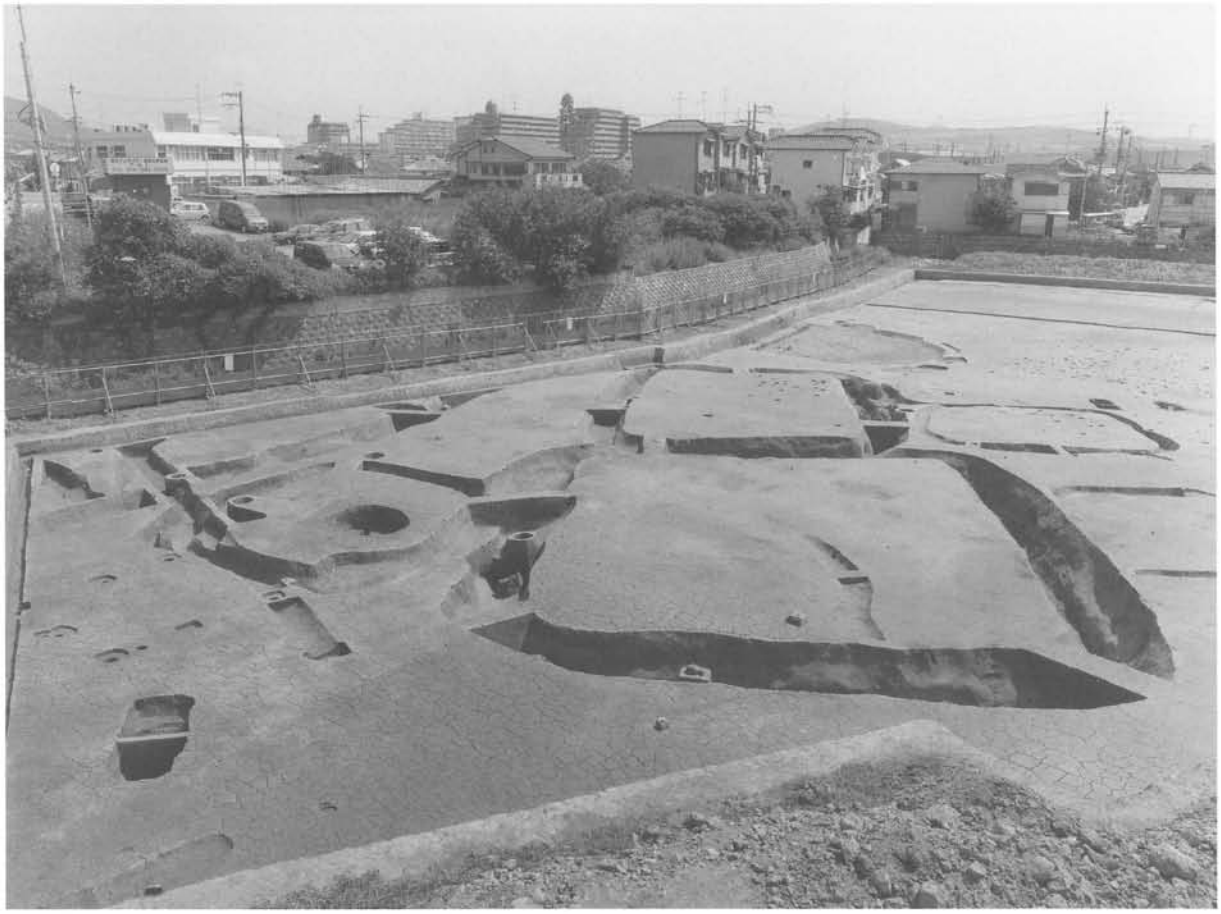
b.安満山古墳群萩之庄C1号墳　埋葬施設（西側から）



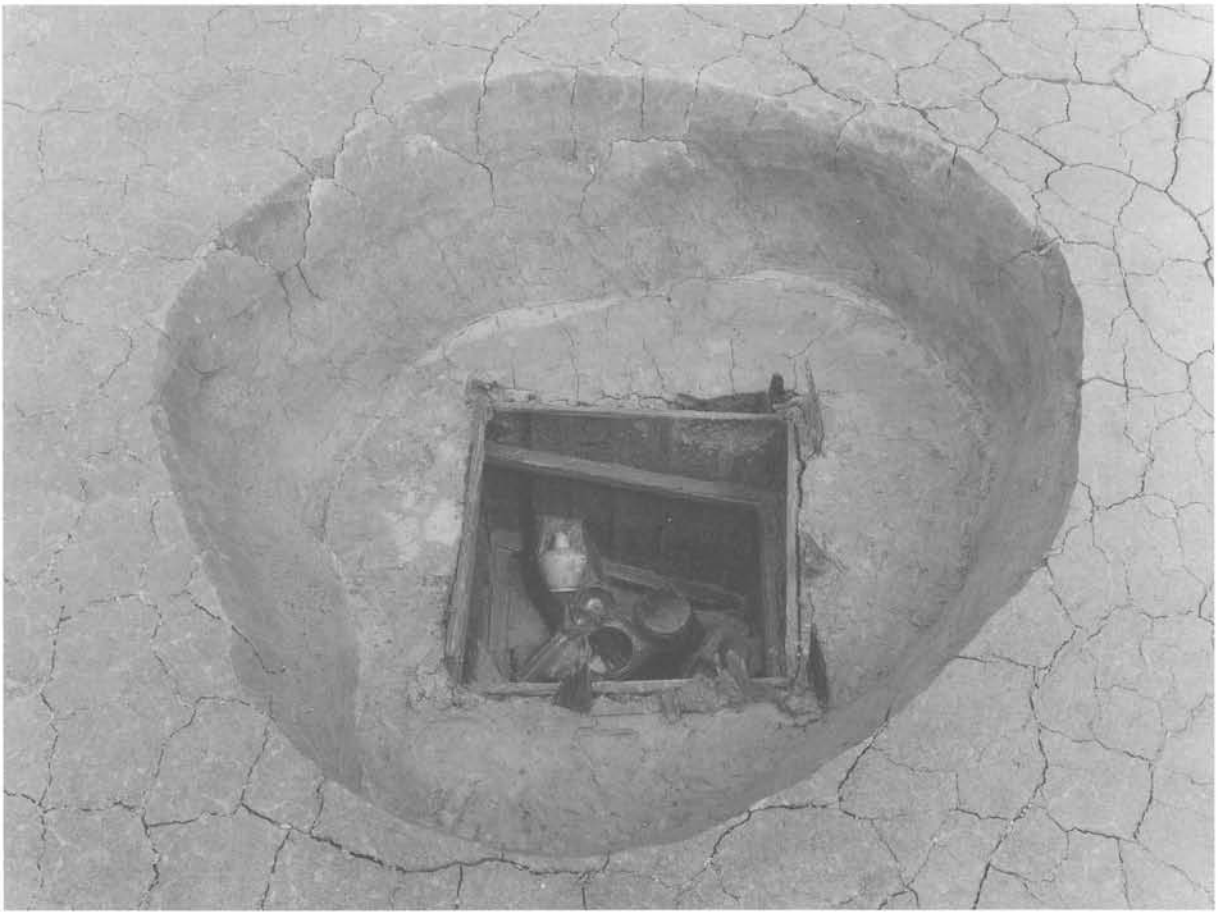
a.神内遺跡　Ⅰ区　縄文土器出土状況



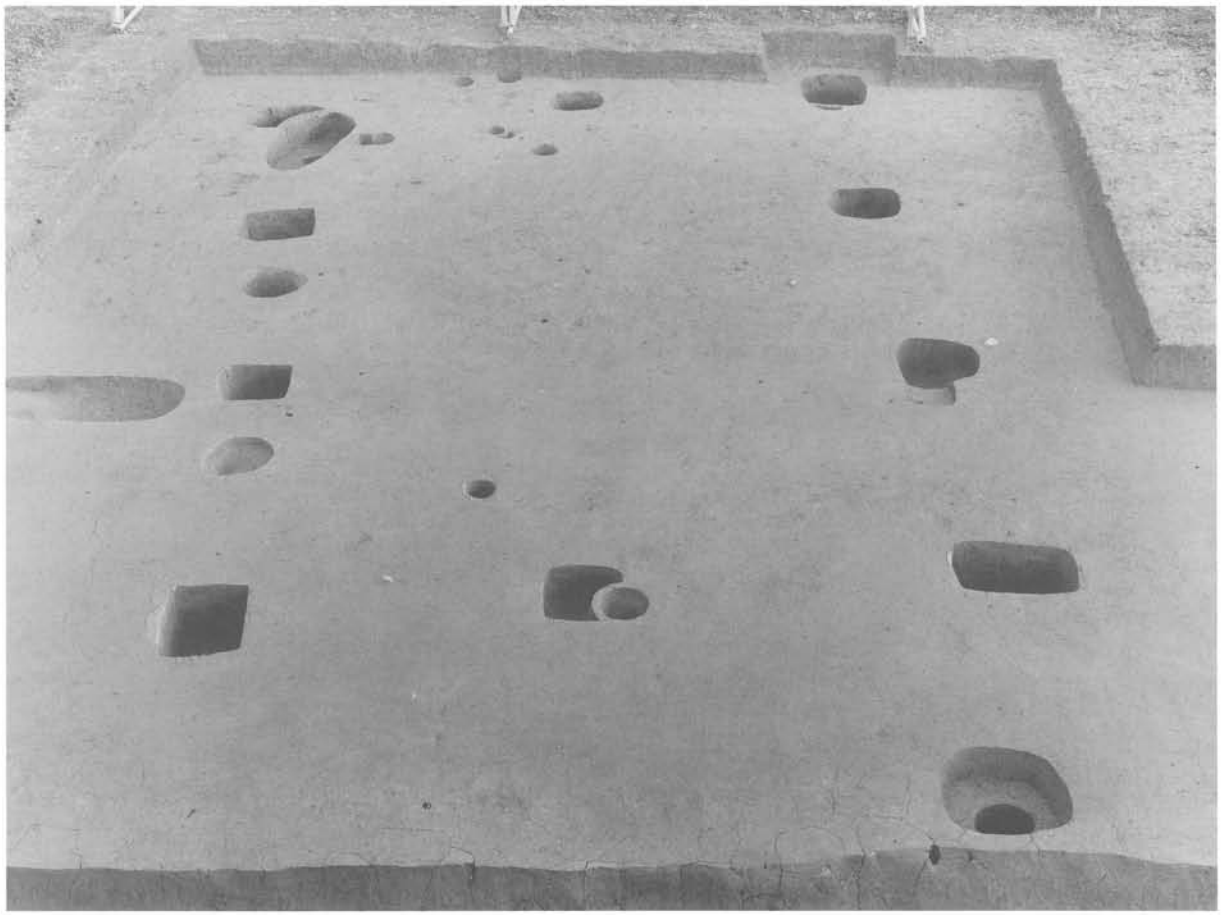
b.神内遺跡　Ⅱ区　竪穴住居1・方形周溝墓13（北側から）



a.神内遺跡　Ⅲ区　方形周溝墓C群（南西側から）

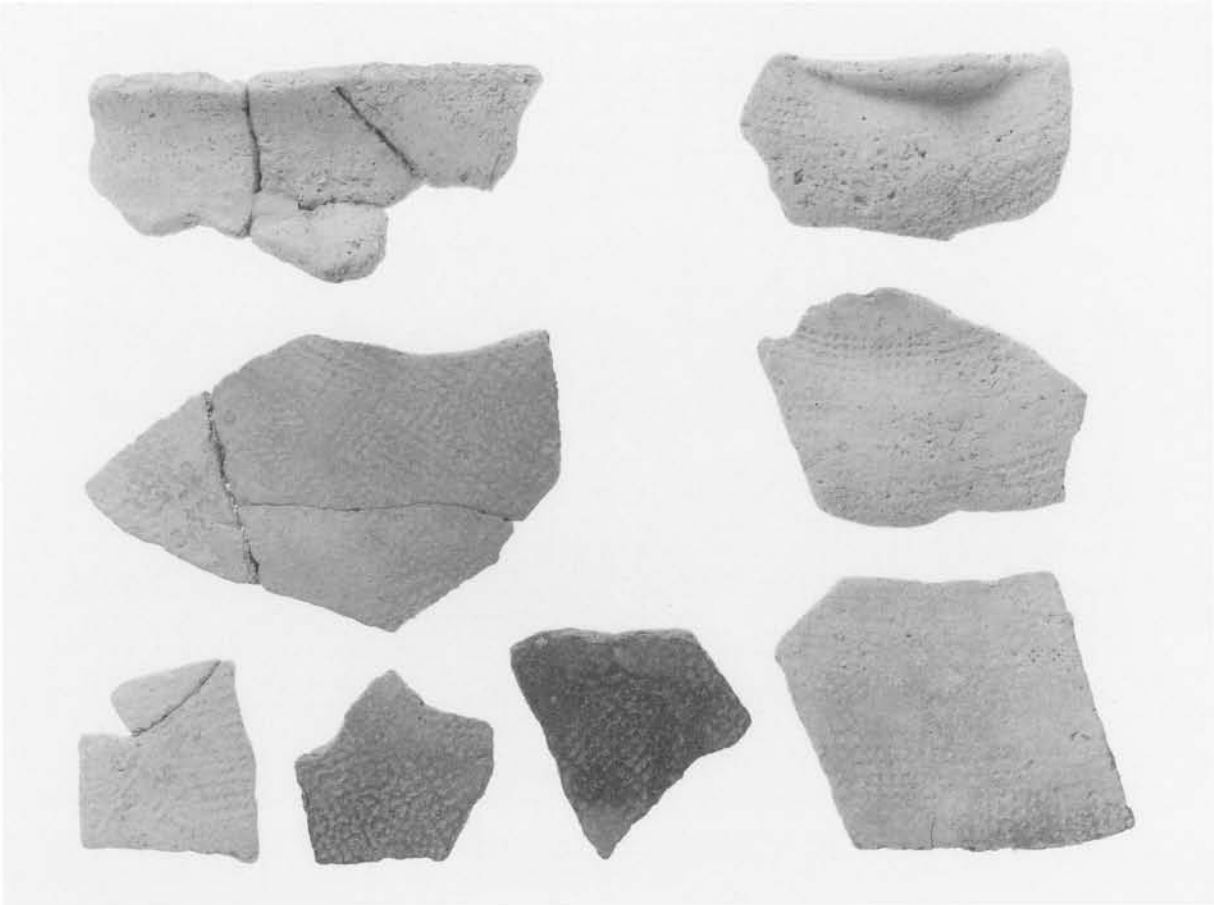


b.神内遺跡　Ⅲ区　井戸3（南側から）



a.神内遺跡　Ⅱ区　建物1（西側から）

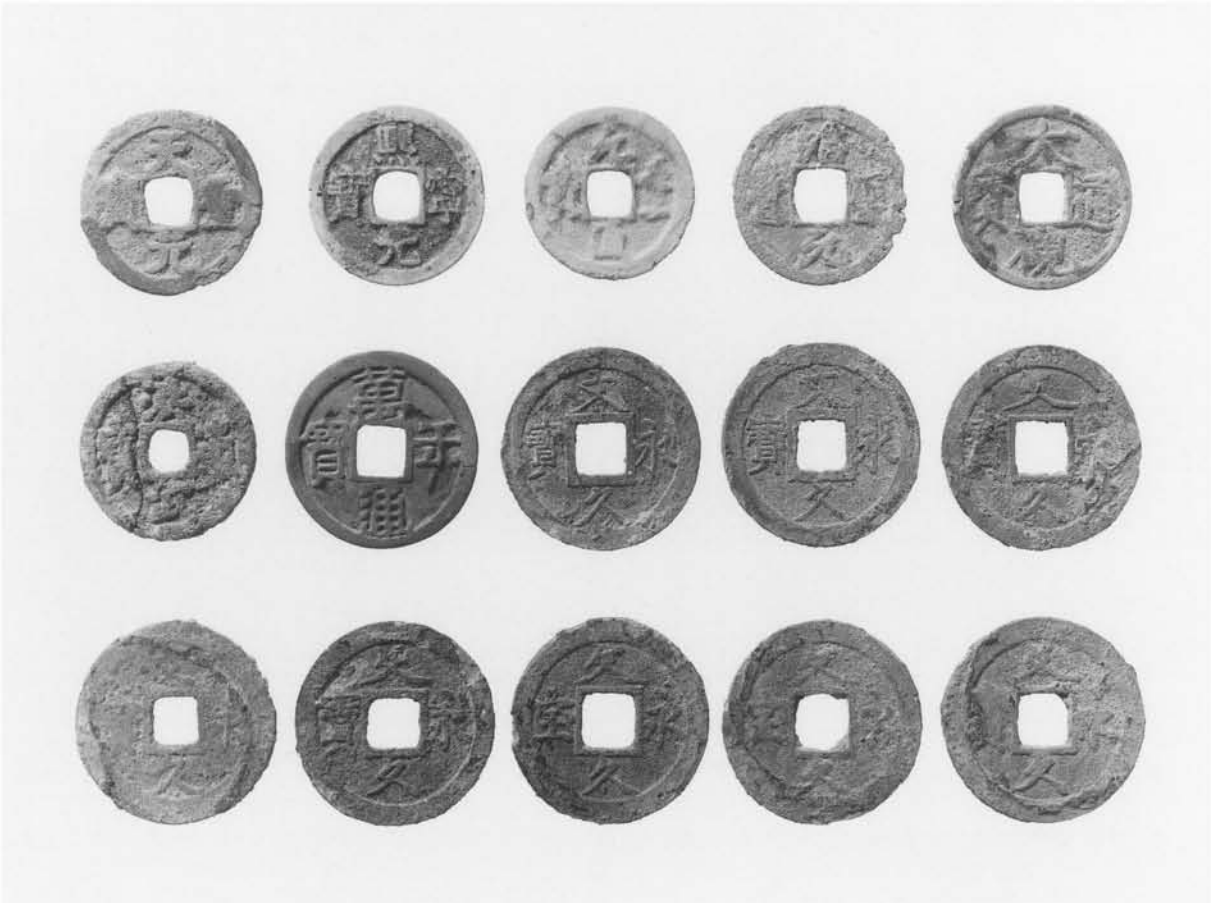
b.神内遺跡　Ⅰ区　屋敷跡（南側から）



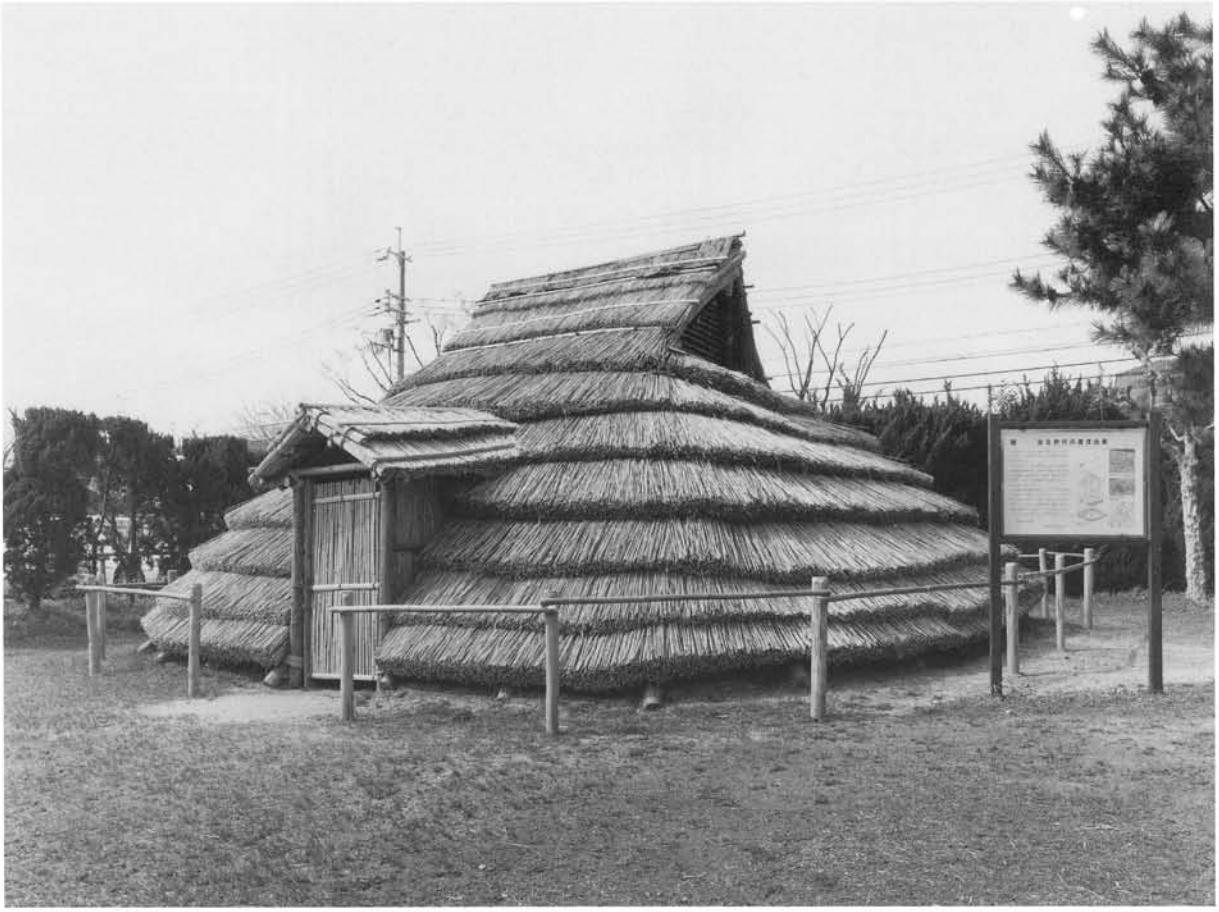
a.神内遺跡　韓式系土器破片

b.神内遺跡　屋敷跡出土の土器・陶磁器

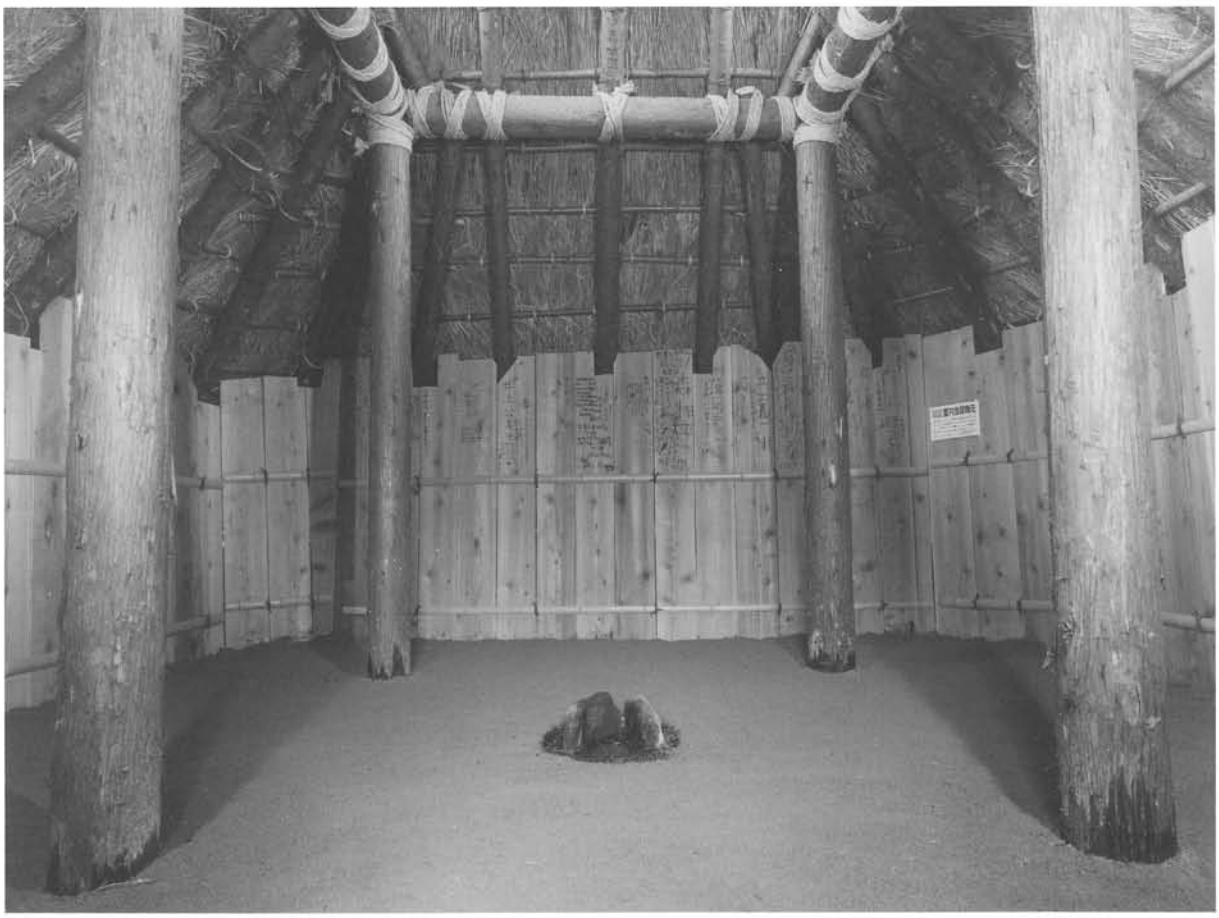
a.神内遺跡　屋敷跡出土の土師器皿類



b.神内遺跡　出土銭貨類



a.完成した復元住居



b.復元住居の内部

編集後記

『高槻市文化財年報　平成１２年度』をおとどけします。

今年は新たに文化財課が発足して最初の年にあたり、文化財保護法が扱う文化財全般に対して、統一的な対応が可能となりました。こうした利点を生かして、今後一層、文化財の保護・啓発活動に努めてまいります。

寒川　旭氏には、今城塚古墳第４次規模確認調査で地滑り痕跡が認められたところ、現地でご指導をいただき、また寄稿して下さいました。深くお礼申し上げます。

本書の編集は鐘ヶ江・高橋がおこない、図版写真は、文化財専門員　清水良真が担当しました。

高槻市文化財年報　平成12年度

平成14年3月29日

発　行　高槻市教育委員会
文化財課埋蔵文化財調査センター
〒569-1042　高槻市南平台五丁目21番１号

印　刷　株式会社　邦文社
〒533-0011　大阪市東淀川区大桐1丁目4番9号